埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第472集

嵐　山　町

古里古墳群清水支群

嵐山郷独身宿舎Ｂ３棟改修工事
（嵐山郷遺跡埋蔵文化財発掘調査整理等作業
及び発掘調査報告書刊行業務委託）
埋蔵文化財発掘調査報告

２０２２

埼　玉　県
公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

このたびの「古里古墳群清水支群」に係る発掘調査報告書の刊行にあたりまして、御尽力賜りました関係の皆様方に深く感謝を申し上げます。

さて、埼玉県立嵐山郷は、重度知的障害や心身障害のある方が利用される、県の福祉を支える重要な社会福祉施設であり、当該独身宿舎の安全性向上や施設の延命化のため、改修工事が計画されました。

一方、当該工事に係る事業予定地とその周辺は、50基を超える古墳から構成される「古里古墳群」を擁する埋蔵文化財包蔵地として、以前からその存在が知られています。

こうしたことから、県教育委員会が文化財保護法に基づき、関係者と慎重に協議を重ねた結果、事業実施にあたっては、発掘調査を実施し記録保存の措置を講じることとなりました。

そこで当事業団が埼玉県から委託を受け、事業予定地の発掘調査を行い、その記録を報告書として、今般刊行することとなりました。

発掘調査の結果、古墳時代の溝跡や土壙などが発見され、溝跡からは古墳時代後期の土師器の甕や坏が出土し、古里古墳群の実態や地域の歴史を明らかにするうえで、貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護及び普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、御尽力いただきました埼玉県福祉部社会福祉課、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、嵐山町教育委員会、地元関係者等の皆様に重ねて御礼申し上げます。

令和４年２月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　依　田　英　樹

例　言

1　本書は埼玉県比企郡嵐山町古里地内に所在する、古里古墳群清水支群第１次調査の発掘調査報告書である。

2　遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

古里古墳群清水支群（№36－109）

第１次調査

埼玉県比企郡嵐山町古里1848-１

平成30年10月３日付け教文資第２－29号

3　発掘調査は、嵐山郷独身宿舎Ｂ３棟改修工事に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部文化資源課が調整し、埼玉県の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4　事業の委託事業名は下記のとおりである。

発掘調査事業（平成30年度）

「嵐山郷独身宿舎Ｂ棟改修工事（嵐山郷遺跡埋蔵文化財発掘調査委託）」

報告書作成事業（令和３年度）

「嵐山郷独身宿舎Ｂ棟改修工事（嵐山郷遺跡埋蔵文化財発掘調査整理等作業及び発掘調査報告書刊行業務委託）」

5　発掘調査・報告書作成事業はＩ－３に示した組織により実施した。発掘調査期間と担当者は以下のとおりである。

発掘調査は第１次調査を平成30年10月24日から平成30年12月31日まで、上野真由美・赤熊浩一が担当した。報告書作成事業は令和３年11月１日から令和３年12月31日まで、富田和夫が担当した。

報告書は令和４年２月24日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第472集として、印刷・刊行した。

6　発掘調査における基準点測量は、株式会社未央測地設計に委託した。

7　発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は富田が行った。

9　出土品の整理・図版作成は主に富田が行い、遺物は金子直行・村山 卓・水村雄功の協力を得た。

10　本書の執筆は、Ｉ－１を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、Ⅳ－２（１）を金子、その他を富田が行った。

11　本書の編集は、富田が行った。

12　本書にかかる諸資料は、令和４年３月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。

13　発掘調査・報告書刊行にあたり、下記の機関・方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）

嵐山町教育委員会　熊谷市教育委員会

新井　端　井上尚明　村上伸二

凡　例

1　本書におけるＸ・Ｙの数値は、世界測地系国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示している。

　Ｃ－３グリッド杭の座標はＸ＝11900.000m、Ｙ＝－47620.000m、北緯36°06′21.9211″東経139°18′15.9227″である。

2　調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本（１グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。

3　グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（Ａ・Ｂ・Ｃ…）、西から東方向に数字（１・２・３…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばＣ－３グリッドと呼称した。

4　本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は、以下のとおりである。

　SD…溝跡　SK…土壙

　P…ピット

5　本書に掲載した遺構番号は、発掘調査時に付した番号を踏襲した。

6　本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

　調査区全体図　１：120

　基本層序　１：60

　溝跡・土壙・ピット　１：60

　縄文土器　１：３

　土師器・須恵器　１：４

　土師質土器・瓦質土器　１：３　１：４

　陶磁器類　１：３

　石器・石製品　１：３　２：３

7　遺構図・遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。

・地山

・須恵器は断面を黒塗りで示した。

8　遺構断面図に表記した水準数値は、全て海抜標高（単位m）を表す。

9　遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・大きさはcm・重さはｇ単位である。

・（　）内は推定値、［　］は残存値を示す。

・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

　Ａ：雲母　Ｂ：片岩　Ｃ：角閃石　Ｄ：長石

　Ｅ：石英　Ｆ：軽石　Ｇ：砂粒子

　Ｈ：赤色粒子　Ｉ：白色粒子

　Ｊ：白色針状物質　Ｋ：黒色粒子

　Ｌ：その他　Ｍ：チャート

　Ｎ：雲母状微粒子

・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を％で示した。

・焼成は良好・普通・不良の３段階に分けた。

・色調は『新版標準土色帖』に照らし、最も近い色相を記した。

・備考には注記№・煤の付着・推定生産地・文様の特徴等を示した。

10　本書に使用した地形図は、国土地理院発行１/50,000地形図、嵐山町・熊谷市・深谷市発行の１/2,500都市計画基本図を編集の上使用した。

目　次

序
例言
凡例
目次
Ⅰ　発掘調査の概要…… 1
　1　発掘調査に至る経過…… 1
　2　発掘調査・報告書作成の経過…… 2
　3　発掘調査・報告書作成の組織…… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境…… 3
　1　地理的環境…… 3
　2　歴史的環境…… 4
Ⅲ　遺跡の概要…… 9
　1　古墳群の概要…… 9
　2　調査区の概要……12
Ⅳ　遺構と遺物……14
　1　古墳時代から古代の遺構と遺物……14
　（1）溝跡 ……14
　（2）土壙 ……18
　（3）ピット ……21
　（4）グリッド出土遺物 ……22
　2　その他の遺物……22
　（1）縄文時代の遺物 ……22
　（2）近世以降の遺物 ……24
Ⅴ　調査のまとめ……28
　1　第１号溝跡の時期について……28
　2　第１号溝跡の性格について……30

挿図目次

第１図　埼玉県の地形 …… 3
第２図　周辺の遺跡 …… 6
第３図　古里古墳群古墳分布図（1）……10
第４図　古里古墳群古墳分布図（2）……11
第５図　基本土層図 ……12
第６図　全体図 ……13
第７図　第１号溝跡 ……15
第８図　第１号溝跡遺物出土状況 ……16
第９図　第１号溝跡出土遺物 ……17
第10図　第２号溝跡 ……19
第11図　土壙 ……20
第12図　ピット ……21
第13図　ピット・グリッド出土遺物 ……22
第14図　縄文時代の出土遺物（土器）……23
第15図　縄文時代の出土遺物（石器）……24
第16図　近世以降の出土遺物（1）……26
第17図　近世以降の出土遺物（2）……27
第18図　参考資料 ……29

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥７
第２表　第１号溝跡出土遺物観察表‥‥‥‥18
第３表　ピット一覧表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥22
第４表　ピット・グリッド出土遺物観察表‥22
第５表　出土石器観察表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥23
第６表　近世以降出土遺物観察表‥‥‥‥‥25

写真図版目次

図版１　１　調査区全景（南から）
　　２　調査区全景（東から）
図版２　１　第１号溝跡（南から）
　　２　第１号溝跡（北から）
　　３　第１号溝跡北西土層断面
　　４　第１号溝跡Ｃ－Ｃ′土層断面
　　５　第１号溝跡遺物出土状況（１）
　　６　第１号溝跡遺物出土状況（２）
　　７　第１号溝跡遺物出土状況（３）
　　８　第１号溝跡焼土塊
図版３　１　第２号溝跡
　　２　第１号土壙
　　３　第２号土壙
　　４　第３・４号土壙
　　５　第５号土壙
　　６　第６号土壙
　　７　第７号土壙
　　８　トレンチ５北側土層断面
図版４　１～４　第１号溝跡出土遺物
図版５　１～３　第１号溝跡出土遺物
　　４　縄文時代の石器（１）
　　５　縄文土器
　　６　縄文時代の石器（２）
　　７・８　近世以降
図版６　１～13　近世以降

Ⅰ　発掘調査の概要

1　発掘調査に至る経過

埼玉県福祉部社会福祉課では、嵐山町の嵐山郷における宿舎棟について、内部改修、外部改修、外構工事等を含む改修工事を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では、県が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前から関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

嵐山郷独身宿舎Ｂ３棟改修工事に係る埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、福祉部社会福祉課長から平成29年12月22日付け社福第1939号で、埼玉県教育委員会教育長宛て埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会がなされた。

当該箇所については、平成30年１月15日に確認調査を実施し、古墳時代以降の溝跡、平安時代以降の土坑が現存することが確認された。埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成30年１月18日付け教生文第2105-１号で、社会福祉課長宛て記録保存のための発掘調査が必要である旨を回答した。その後、事業の計画変更及び埋蔵文化財の現状保存は困難との結論に達したため、発掘調査の措置を講ずることとした。

調査に際し、発掘調査実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、福祉部社会福祉課、文化資源課の三者で、調査範囲、期間などについて連絡調整を行い、平成30年５月23日付け教文資第382-１号で、埋蔵文化財保護に関する事前協議が整った旨を通知した。

文化財保護法第94条第１項の規定に基づく埼玉県知事からの通知に対する、同条第４項の規定による埼玉県教育委員会教育長からの勧告は以下のとおりである。

平成30年１月29日付け教生文第５-1625号

文化財保護法第92条第１項の規定に基づく公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からの発掘調査届に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は以下のとおりである。

平成30年10月３日付け教文資第２-29号

（埼玉県教育局市町村支援部文化資源課）

2　発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

古里古墳群清水支群の発掘調査は、嵐山郷独身宿舎Ｂ３棟改修工事に先立ち、平成30年10月24日から平成30年12月31日まで実施した。調査面積は264㎡である。平成30年10月１日に埋蔵文化財発掘調査届を嵐山町教育委員会に提出し、事務手続きを行った。

10月24日調査区内の樹木伐採に着手し、11月６日器材搬入、11月７日囲柵設置、11月８日に敷鉄板を敷設した。11月12日重機による表土掘削作業と補助員による遺構確認作業を始めた。11月13日基準点測量と測量杭の打設作業を実施した。

遺構確認作業の結果、溝跡２条、土壙７基、ピット23基が検出された。順次遺構精査を実施し、合せて遺構断面図・平面図、個別の写真撮影等の記録作成作業を実施した。平成30年11月29日高所作業車による全景写真撮影を実施した。平成30年12月14日までに現地調査を終了した。12月18日器材搬出、12月20日埋蔵物発見届（小川警察署長宛）と埋蔵文化財保管証（埼玉県教育長宛）を提出した。

（2）報告書作成

報告書作成事業は、令和３年11月１日から令和３年12月31日まで実施した。遺物は水洗・注記後、接合・復元作業を行った。接合した遺物は実測図を作成した。実測には磁気式三次元位置測定装置、正射投影画像撮影機を活用した。遺物実測図はトレースと必要に応じて拓本を採った。スキャナを使用してこれらをデジタルデータ化し、編集して挿図版下を作成した。また令和３年12月に遺物写真を撮影し、写真図版の版下を作成した。

遺構は、発掘調査で作成された平面図・土層断面図等を修正・編集して第二原図を作成した。パソコンを使用してデジタルトレースと編集作業を行い、印刷用の挿図版下を作成した。遺構写真は、発掘調査で撮影したものから選択・編集し、写真図版用の版下を作成した。令和３年11月下旬から12月にかけて原稿を執筆し、遺構・遺物の挿図と写真図版などを組み合わせて割付を作成した。

12月24日印刷業者に入稿し、校正を３回行い、令和４年２月24日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第472集『古里古墳群清水支群』（本書）を刊行した。図面・写真・データ・遺物等の諸資料は、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

3　発掘調査・報告書作成の組織

平成30年度（発掘調査）

理事長	藤田栄二	**調査部**	
常務理事兼総務部長	川目晴久	調査部長	瀧瀬芳之
総務部		調査部副部長	吉田稔
総務部副部長	田中広明	主幹兼調査第二課長	上野真由美
総務課長	新井了悟	主任専門員	赤熊浩一

令和３年度（発掘調査）

理事長	依田英樹	**調査部**	
常務理事兼総務部長	福沢景	調査部長	田中広明
総務部		調査部副部長兼整理第一課長	福田聖
総務部副部長	上野真由美	整理第二課長	金子直行
総務課長	鈴木裕一	主任専門員	富田和夫

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

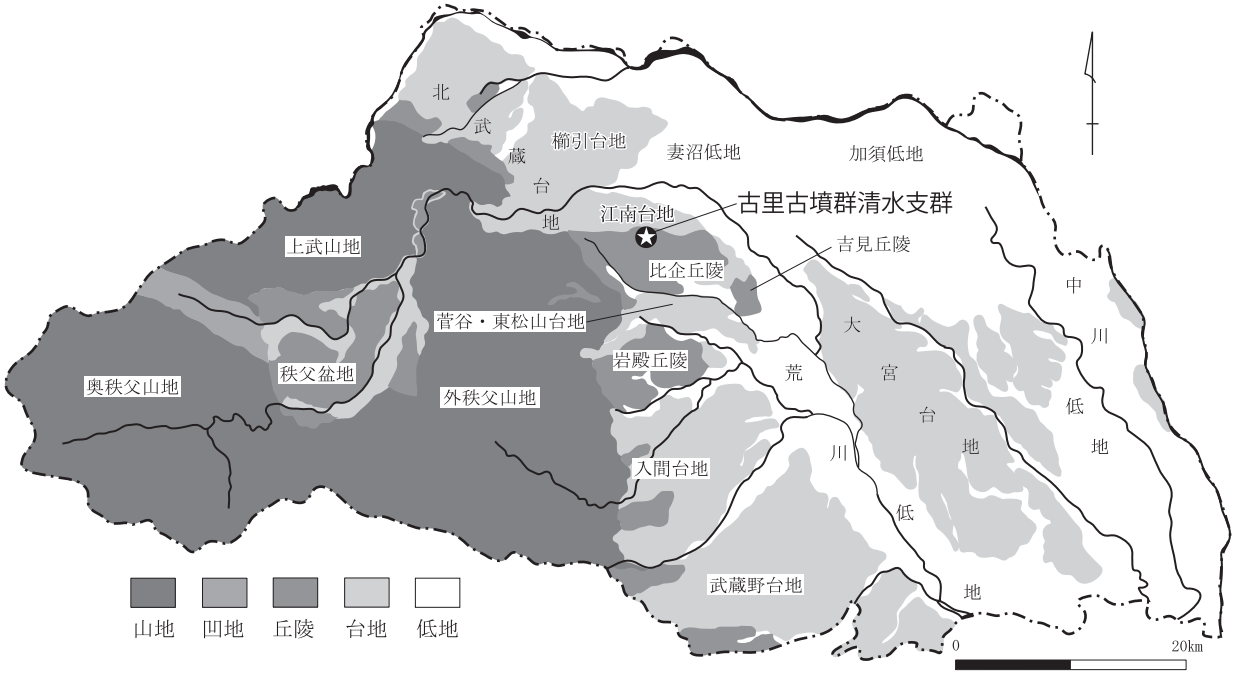
古里古墳群は嵐山町の最北端、東武東上線武蔵嵐山駅の北約８㎞、関越自動車道嵐山小川インターチェンジから北に約５㎞の比企郡嵐山町古里に所在する。北は深谷市、東は熊谷市、西は小川町・寄居町と境を接する。

嵐山町周辺の地形は、西方に秩父山地、東方に関東平野が広がり、大まかに山地、丘陵、台地に分けることができる。特に丘陵地形が町内の大部分を占めている。この丘陵は比企丘陵と呼ばれ、古里古墳群は比企丘陵の北端に位置する。比企丘陵は外秩父山地から東に半島状に突出し、嵐山町七郷に由来する「七郷層」と呼ばれる第三紀に形成された岩盤層を基層としている。北側は江南台地、南側は菅谷台地と東松山台地、東は独立丘陵状の吉見丘陵に区分される。東松山台地の南には岩殿丘陵（物見山丘陵）が広がっている。標高は二ノ宮山（132m）を最高地点として概ね70～100m前後である。

比企丘陵は槻川、兜川、滑川、粕川、市野川など中小河川によって開析され、幾筋もの支谷と尾根が形成されている。樹枝状の複雑な地形が発達した谷の奥には溜池が数多く存在し、谷津田の灌漑に利用されてきた。溜池は比企丘陵を象徴する景観を形作ってきたともいえ、古里古墳群の周辺にも岩根沢沼と駒込沼が存在している。

古里古墳群の南側は滑川が東流し、熊谷市との境界付近で南東に流路を変える。この滑川流域では段丘崖の発達がみられず、丘陵と沖積地の間は緩斜面となっている。一方、古墳群の北側は東流する和田川を挟んで江南台地に移行する。江南台地は荒川によって形成された河岸段丘の上位段丘面にあたり、下末吉面に対比されている。小支谷が発達し、複雑な地形が形成された比企丘陵と対照的である。

嵐山町の古墳群は、こうした沖積地を望む丘陵の先端部分を好んで選地しており、それぞれが尾根毎にまとまりをなして形成されている。



第１図　埼玉県の地形

2　歴史的環境

本節では、古里古墳群周辺の遺跡について概観する。

旧石器時代

嵐山町内における旧石器時代の遺跡は少なく、行司免遺跡でナイフ形石器３点、槍先型尖頭器４点など、尺尻遺跡（29）からナイフ形石器１点が採集されている。滑川町用土庵Ｂ遺跡（88）からは石刃とナイフ形石器、二ツ沼南遺跡（84）からは掻器が出土した。また、古里古墳群から東に約1.5㎞に位置する熊谷市塩西遺跡（158）からはナイフ形石器文化期の資料が出土した。寄居町赤浜牛無具利遺跡（216）や稲荷窪遺跡では石器集中からナイフ形石器・掻器が出土した他、深谷市白草遺跡（202）は細石刃文化期の良好な遺跡である。

縄文時代

縄文時代草創期では、古里古墳群内の南面する丘陵斜面に位置する北田遺跡（２）からは多縄文系土器の細片が出土した。滑川町打越遺跡から約400点の多縄文系土器と竪穴住居跡が発見され、深谷市宮林遺跡と共に最古段階の竪穴住居跡と考えられている。江南台地上の深谷市四反歩遺跡（193）や上本田遺跡（200）からは有舌尖頭器が発見されている。

早期になると遺跡がやや増加するが、なお前半段階では少ない。越畑城跡（39）、年中坂Ａ遺跡（90）・年中坂Ｂ遺跡（36）、北田遺跡から撚糸文、沈線文土器が、塩前遺跡（152）からは撚糸文、押型文、条痕文系土器群が出土している。深谷市四反歩遺跡からは、撚糸文期の住居跡７軒が発見された。早期後半になると、遺物が出土する遺跡は増加する傾向にあるが、遺構の検出例は少ない。そのなかで、金平遺跡（52）では条痕文系野島式土器を伴う住居跡６軒が検出され、定住生活が本格的に始まったことがわかる。また、丘陵に位置する亥遺跡（33）からは条痕文期と思われる10基の炉穴が検出された。北田遺跡からも早期末葉の住居跡が１軒発見されている。

前期には遺跡が急増するが、黒浜式期以降の遺跡が圧倒的に多い。前期前半の花積下層～関山式期の遺跡は、越畑城跡・花見堂遺跡（51）・寺山遺跡（62）、屋田遺跡（67）、小川町平松台遺跡（143）・姥ヶ沢遺跡（180）などがある。平松台遺跡からは５軒の竪穴住居跡が検出された。

黒浜式期～諸磯式期の遺跡としては、都幾川流域の平松台遺跡、山根遺跡（55）が調査されている。山根遺跡は黒浜式期～諸磯ｂ式期にかけての住居跡が14軒検出され、広場を囲む中期的な環状集落が形成された（嵐山町1987）。また、該期の遺跡は丘陵上にも進出し、油面遺跡（30）では狭い尾根上などから住居跡が４軒検出されている。

中期になると集落の更なる増加と大規模化が進み、行司免遺跡、中郷遺跡（44）、金平遺跡などがあげられる。特に行司免遺跡は、勝坂式期～加曽利Ｅ式期を主体に営まれた大規模環状集落で、調査された住居跡は261 軒を数える。

後期になると、中期から一変して遺跡数も規模も急激に減少する。称名寺式土器を伴う柄鏡形の敷石住居跡が検出された金平遺跡、花見堂遺跡、行司免遺跡などで小規模な集落跡が確認される程度である。これは晩期に至るとより顕著で、北田遺跡、花見堂遺跡、屋田遺跡、東松山市附川遺跡などから浮線文土器の破片が検出されているが、明確な遺構は発見されなくなる。後・晩期の急激な遺跡の減少はこの地域の普遍的な現象で、遺跡が確認できない状態は弥生時代中期まで続く。

弥生時代

弥生時代前期から中期にかけての遺跡は殆ど発見されていないが、大野田西遺跡（26）から中期後半の壺胴部破片、金平遺跡から無文の壺型土器と箆描山型文と太い沈線による櫛描簾状文を施す甕の破片が出土した。中期末～後期前半の所産であろう。

後期になると、生産域と考えられる沖積地に面した丘陵の先端に集落が形成される。滑川を望む丘陵から裾部にかけては後期前半の岩鼻式期から吉ヶ谷式期の遺跡がまとまっており、船川遺跡(75)、25 軒の住居跡が確認された大野田西遺跡や蟹沢遺跡（23)、屋田遺跡が形成される。

江南台地上では、深谷市の万願寺遺跡(196)焼谷遺跡(190)、円阿弥遺跡(199)、富士山遺跡（179)、白草遺跡、熊谷市（旧江南町）の姥ヶ沢遺跡を含む千代遺跡群などで集落跡が確認された。富士山遺跡は岩鼻式期、他は吉ヶ谷期の遺跡である。

古墳時代

前期の遺跡としては、北田遺跡から２軒の住居跡と１基の土壙が検出された。花見堂遺跡からは古墳時代前期の住居跡が８軒検出されている。都幾川右岸の段丘面に立地する行司免遺跡からは古墳時代前期から中期の住居跡が68軒、前期の方形周溝墓が10基検出され、周辺でも最大規模の集落である。熊谷市塩西遺跡から古墳時代前期の祭祀土壙が１基、塩丸山遺跡（154）から住居跡１軒、諸ヶ谷遺跡（150）から住居跡１軒が発見された。

古墳では丘陵上に塩古墳群（155）第Ｉ支群が形成される。２基の前方後方墳と21基の方墳で構成されており、前方後方墳からは底部穿孔された壺が出土した。調査された狸塚25号墳は、一辺８ｍの方墳である。主体部は木棺直葬で、副葬品の鉄剣とガラス玉が出土した。この塩古墳群第Ｉ支群は滑川上流域における古墳の初現であり、後に展開する塩古墳群の他支群や古里古墳群は、そこから派生した古墳群と捉えることもできる。

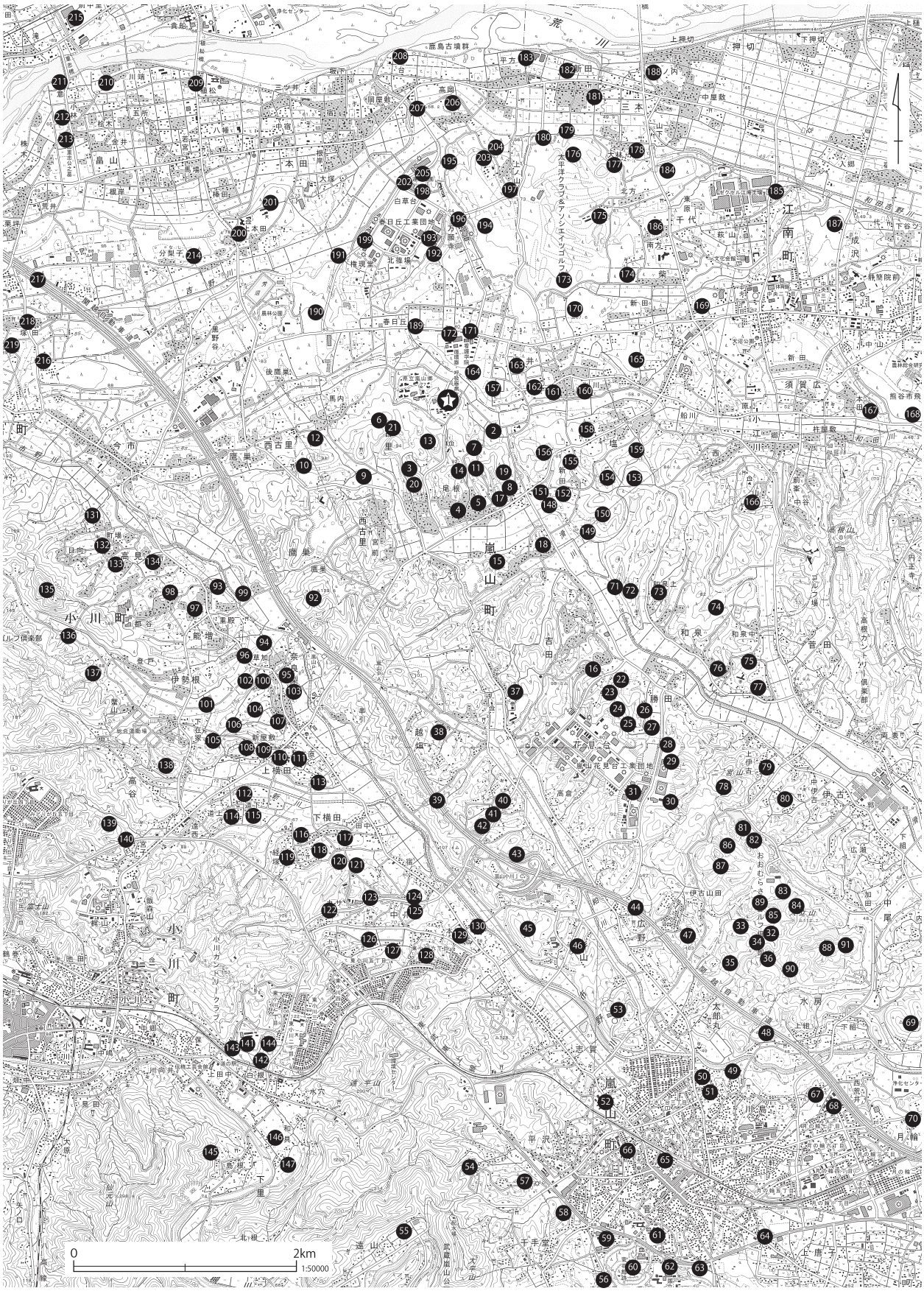
中期古墳は滑川町屋田遺跡第１・４号墳が該当する。和泉期の高坏や坩などが周溝等から発見されている。集落跡は、前述した行司免遺跡が最大規模の集落跡で、和泉期の住居跡にはカマドを持つものと持たないものが併存していた。金平遺跡では和泉期末葉から鬼高期初頭の住居跡が６軒検出された。熊谷市塩新田遺跡第１号竪穴住居跡は和泉期前半の住居跡で脚部の長い高坏や、球胴の平底甕などが出土した。

後期には多くの古墳群が成立し、把握される遺跡数は飛躍的に増加する。古墳が丘陵から台地部分にかけて広く展開する状況に対して、対応するであろう集落遺跡の確認例は圧倒的に少ない。古里古墳群周辺の集落跡は、滑川の沖積地を挟んだ対岸の丘陵上の西ノ谷遺跡（15）から６軒の住居跡が検出された程度である。東落合遺跡から後期の住居跡18軒が検出されている。和田川流域右岸の塩西遺跡で11軒の住居跡が確認された。和田川流域左岸では本田東台遺跡（167）で大規模な集落跡が発見され、「踊る埴輪」が出土した古墳として著名な野原古墳群（168）が隣接することから、野原古墳群を造営した首長層との強い関わりが想定されている（江南町1995)。

古墳群の多くは、円墳を主体とした６世紀から７世紀にかけてのもので、７世紀前後に築造された古墳は、主体部に胴張を持つ横穴式石室を採用する例が多い。滑川流域では、古里古墳群（１）や塩古墳群、天神山古墳群（22）が存在し、和田川沿いでは、立野古墳群（157)、桜山古墳群(172)、野原古墳群などが存在する。

荒川右岸には鹿島古墳群（208)、塚原古墳群(209)、市ノ川流域では、嵐山町から滑川町にかけて分布する大規模な屋田（月輪）古墳群（67・68)、嵐山町花見堂古墳群（50)、小川町鷹巣山古墳(92）などがある。古里古墳群の北東には、熊谷市権現坂埴輪窯跡（177）と姥ヶ沢埴輪窯跡（176）が存在し、古里古墳群及び塩古墳群に供給された埴輪の一部は、両窯跡から供給された可能性が高い。周辺にある古墳との受給関係が注目される。

滑川町寺谷廃寺は飛鳥寺系の東日本最古級の瓦をもつことで知られており、周辺には五厘沼（羽尾）窯跡、平谷窯跡（瓦陶兼業)、花気窯跡（滑川町2020）の須恵器窯跡が築窯されている。



第２図　周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡一覧（第２図）

No.	遺跡名	所在	No.	遺跡名	所在	No.	遺跡名	所在
1	古里古墳群　　清水支群	比企郡 嵐山町	74	松原古墳群	比企郡 滑川町	147	和具（１）遺跡	熊谷市
2	北田支群		75	船川遺跡		148	塩新田古墳	
3	二塚支群		76	畠中古墳群		149	西ノ台塚群	
4	尾根西支群		77	山崎古墳群		150	諸ヶ谷遺跡	
5	尾根支群		78	旧伊古神社		151	塩新田遺跡	
6	蟹沢支群		79	麓山古墳群		152	塩前遺跡	
7	上土橋支群		80	郷社後古墳群		153	かのえ塚群	
8	駒込支群		81	台田嶺Ａ遺跡		154	塩丸山遺跡	
9	上耕地支群		82	台田嶺Ｂ遺跡		155	塩古墳群	
10	神山支群		83	二ツ沼北遺跡		156	塩荒古墳群	
11	岩根沢横穴墓群		84	二ツ沼南遺跡		157	立野古墳群	
12	五領台遺跡		85	二ツ沼西遺跡		158	塩西遺跡	
13	二ッ塚古墳		86	柳沢Ａ遺跡		159	丸山遺跡	
14	尾根横穴墓群		87	柳沢Ｂ遺跡		160	出雲乃伊波比神社	
15	西ノ谷遺跡		88	用土庵Ｂ遺跡		161	境田遺跡	
16	泉蔵院遺跡		89	中尾遺跡		162	岩比田遺跡	
17	西原遺跡		90	年中坂Ａ遺跡		163	板井・氷川遺跡	
18	陣屋古墳群		91	天裏遺跡		164	金山遺跡	
19	尾根古墳群		92	鷹巣山古墳	比企郡 小川町	165	宝光寺比裏遺跡	
20	中内出遺跡		93	東遺跡		166	釜場遺跡	
21	藤塚古墳群		94	草加古墳群		167	本田東台遺跡	
22	天神山古墳群		95	奈良梨館跡		168	野原古墳群	
23	蟹沢遺跡		96	岡原遺跡		169	原谷遺跡	
24	芳沼入遺跡		97	大杉遺跡		170	谷足館跡	
25	芳沼入下遺跡		98	都谷遺跡		171	桜山遺跡	
26	大野田西遺跡		99	一ノ裏遺跡		172	桜山古墳群	
27	大野田遺跡		100	貝塚遺跡		173	寺内廃寺	
28	尺尻北遺跡		101	片瀬遺跡		174	結城塚古墳群	
29	尺尻遺跡		102	台ノ前遺跡		175	天神谷遺跡	
30	油面遺跡		103	諏訪神社奉祀		176	姥ヶ沢埴輪窯跡群	
31	新田坊遺跡		104	行人塚古墳群		177	権現坂埴輪窯跡	
32	細沼北遺跡		105	石塚古墳		178	権現坂遺跡	
33	亥遺跡		106	寿源寺遺跡		179	富士山遺跡	
34	申酉遺跡		107	方墳行人塚		180	姥ヶ沢遺跡	
35	酉亥遺跡		108	経塚遺跡		181	上新田遺跡	
36	年中坂Ｂ遺跡		109	峯久保遺跡		182	鹿島中世墳墓	
37	山王下遺跡		110	新屋敷塚		183	平方前遺跡	
38	幡後谷津遺跡		111	峰原遺跡		184	宮下遺跡	
39	越畑城跡		112	中井遺跡		185	上前原遺跡	
40	大木前遺跡		113	新田古墳群		186	上杉館跡	
41	小栗北遺跡		114	武田信俊公館		187	行人塚古墳群	
42	小栗遺跡		115	宮脇遺跡		188	三本堀之内	
43	谷ツ遺跡		116	悪戸遺跡		189	春日丘遺跡	深谷市
44	中郷遺跡		117	越弥遺跡		190	焼谷遺跡	
45	杉山城跡		118	稲岡遺跡		191	権現堂遺跡	
46	薬の峰古墳群		119	経塚遺跡		192	四反歩南遺跡	
47	下郷古墳群		120	西稲岡遺跡		193	四反歩遺跡	
48	寺の台古墳		121	久保ヶ谷戸遺跡		194	百済木遺跡	
49	岩花古墳群		122	カサ遺跡		195	荷鞍ヶ谷戸遺跡	
50	花見堂古墳群		123	日向遺跡		196	万願寺遺跡	
51	花見堂遺跡		124	本宿前遺跡		197	向山遺跡	
52	金平遺跡		125	宮前遺跡		198	諦光寺跡	
53	六丁遺跡		126	内郷（１）遺跡		199	円阿弥遺跡	
54	旧平沢寺僧坊跡群		127	内郷（２）遺跡		200	上本田遺跡	
55	山根遺跡		128	西ヶ谷戸古墳群		201	上大塚古墳群	
56	山王古墳群		129	下原道南遺跡		202	白草遺跡	
57	表古墳群		130	下原道北遺跡		203	清水山古墳群	
58	原古墳群		131	日丸遺跡		204	平方前古墳群	
59	向原古墳群		132	町場遺跡		205	竹之花遺跡	
60	菅谷館跡		133	山ノ神遺跡		206	船山遺跡	
61	稲荷塚古墳		134	六所遺跡		207	山ノ腰遺跡	
62	寺山古墳群		135	高見城跡		208	鹿島古墳群	
63	東原古墳群		136	関下遺跡		209	塚原古墳群	
64	西原古墳群		137	天神屋遺跡		210	川端遺跡	
65	東側古墳群		138	道下遺跡		211	如意遺跡	
66	東昌寺古墳群		139	高谷砦遺跡		212	如意南遺跡	
67	屋田古墳群		140	宮子遺跡		213	畠山館跡	
68	月輪古墳群	比企郡 滑川町	141	平松１号墳		214	本田館跡	
69	平古墳群		142	平松２号墳		215	見目古墳群	
70	宮前遺跡		143	平松台遺跡		216	赤浜牛無具利遺跡	大里郡 寄居町
71	西浦遺跡		144	松の木遺跡		217	鶴巻遺跡	
72	西浦Ⅱ遺跡		145	笠郷遺跡		218	塚田遺跡	
73	三門館跡		146	和具（２）遺跡		219	前塚田遺跡	

奈良・平安時代

古里古墳群の周辺には該期の集落は殆ど検出されていない。市野川右岸の金平遺跡は30軒の住居跡が調査され、８世紀初頭～９世紀後半まで集落が継続した。市野川と粕川に挟まれた低丘陵に立地する六丁遺跡（53）からは34軒の住居跡と２基の井戸跡が検出された。周辺の可耕地を背景に成立した集落で、８世紀前半から10世紀にかけて営まれた。同様に、粕川と市野川に挟まれた丘陵上に立地する大木前遺跡（40）からは７世紀後半～９世紀末葉の住居跡が12軒、隣接する小栗遺跡（42）からは住居跡５軒、小川町日向遺跡（123）からは22軒の住居跡が検出され、８世紀前半から９世紀中頃まで集落が継続した。嵐山町谷ツ遺跡（43）も同様な立地で、７世紀末葉～10世紀前半の住居跡31軒が調査された。

一方、粕川と滑川に挟まれた急峻な丘陵地にも多数の遺跡が営まれたことが明らかになった。滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群では13遺跡が確認され、天裏遺跡（91）で36軒、柳沢Ａ遺跡（86）で15軒、柳沢Ｂ遺跡（87）で11軒の住居跡が検出されたが、他は10軒に満たない小規模な集落であった。また、年中坂Ａ遺跡からは８世紀初頭の須恵器窯跡が１基単独で検出されている。

花見台工業団地内遺跡群でも同様な傾向が認められ、蟹沢遺跡で12軒、新田坊遺跡（31）で11軒検出された他は、大野田西遺跡や油面遺跡から１～３軒の住居跡が検出されたにとどまる。

丘陵奥にまで遺跡が進出する背景として、技術力をもった集団が組織的に丘陵開発に着手したという指摘がある（植木1995）。また、渡辺一は８世紀以降丘陵内に集落が進出した要因に、炭焼き等森林の用益活動専用の居住地の成立を想定した。住居の継続性や再生産機能の乏しさを「疑似集落」、「第２の集落」と呼び、９世紀後半まで存続したと考え、その一方で、「離れ国分」と言われてきた１軒または２軒の住居跡に仏教関係遺物が伴う場合が多い点を指摘した。柳沢Ａ遺跡からは四面廂の仏堂、中尾遺跡（89）、用土庵Ｂ遺跡、天裏遺跡からは瓦塔が出土し、丘陵の奥の遺跡形成と仏教的な営為を示す例が増えている。

本格的な伽藍を備えた仏教寺院は、熊谷市寺内廃寺（173）がある。小川町慈光平廃寺は108箇所の平場を備えた山岳寺院である。比企丘陵には大平山山腹の標高120～140mに位置する比丘尼山廃寺がある。雛壇上に造成され、平場には建物跡と瓦が発見された。出土遺物から８世紀～９世紀末頃まで存続したことが判明している。

比企丘陵内の将軍沢窯跡群では、須恵器生産が大規模に行われた。篠新田遺跡からは須恵器生産に伴う工房跡や工人集落が検出され、須恵器生産に関わる遺跡群が大規模に展開したと思われる。

中世

中世には鎌倉街道上道が嵐山町内を通過した。笛吹峠から大蔵館跡、菅谷館（60）を経て、寄居町今市を通過するルートである。ルートに沿う寄居町塚田遺跡（218）、前塚田遺跡（219）は中世の鋳造遺跡で、梵鐘や鍋の鋳型、溶解炉などが発見され、「塚田鋳物師」の本拠地と推定されている。

嵐山町ではこの街道に沿って大蔵館跡、菅谷館跡、平沢寺、金平遺跡など多数の中世遺跡が知られている。菅谷館跡は畠山重忠の居館とされ、旧平沢寺から発見された久安四年（1148）銘の鋳銅製経筒に刻まれた「平朝臣茲綱」は、畠山重忠の祖「秩父重綱」と考えられている。金平遺跡からは梵鐘や仏具などを鋳造した工房跡が検出された。鋳型の銘から弘安四年（1281）蒙古襲来の年、仏具を生産していた状況が確認され、平沢寺との関係が示唆された。旧平沢寺僧房群は、四面堂跡や池跡を有し、地方寺院としては破格の規模を誇っていたことが判明した。

戦国期には後北条氏による甲斐武田氏、越後上杉氏に対する防御ラインとして、菅谷城、杉山城、越畑城等の城郭が整備されたのである。

Ⅲ　遺跡の概要

１　古墳群の概要

古里古墳群は嵐山町古里地内に所在し、比企丘陵の北端部に位置する。古墳群は丘陵の尾根や支丘ごとに小規模なまとまりで構成され、全部で11支群から成る。古里古墳群東側には熊谷市塩古墳群、和田川を挟んだ北側の江南台地には立野古墳群が分布し、古墳群の密集地域を形成している。

古里古墳群には52基を超える古墳が確認されているが、削平されて消滅した古墳を含めると相当数に上ると推定される。また、古里古墳群と塩古墳群は不可分な存在であり、ほぼ同一古墳群の一部とみることができる。

古里古墳群は６世紀前半から７世紀前半にかけて築造されたと考えられているが、築造始期は５世紀代に遡る可能性の高いことが指摘されている(埼埋文2009)。また、丘陵の裾部に築造された古墳は埴輪を持ち、丘陵の標高の高い地点に築造された古墳は埴輪を持たないことから、６世紀前半を中心に竪穴系主体部を持つ古式群集墳として、丘陵斜面下位から裾部に広く展開した後、横穴式石室を持つ新式群集墳として丘陵斜面上部に墓域を拡大したことが予想されている(埼埋文前掲書)。

古里古墳群は、駒込、尾根、尾根西、岩根沢横穴墓、上土橋、北田、清水、二塚、蟹沢、上耕地、神山の11支群が確認されている（第３・４図)。現状で知られている古墳はすべて径20m以下の小円墳で、前方後円墳や大型の円墳、方墳は確認されていない。また、岩根沢沼の谷頭付近には横穴墓が開口している。確認されているのは片袖式の横穴墓が１基のみであるが、本来群を構成していた可能性がある。現在までに、駒込支群第１・２・27号墳、北田支群第１～３号墳、尾根支群第５・10号墳、上土橋支群第１号墳の発掘調査が実施されている。駒込支群とその周辺の様相について触れておく。

駒込支群

古里古墳群中最大の支群で、27基が確認されている。古墳は標高84.2mの丘陵頂部から南に延びる尾根の斜面にかけて分布し、特に標高約60mの丘陵先端部に集中する。第23号墳は凝灰岩製の石室が露出している。支群の築造年代は６世紀前半から７世紀前半にかけて継続したと推定される。1986年嵐山町遺跡調査会によって第１・２号墳、2003年当事業団によって第27号墳が調査された。第27号墳は径12～13mの円墳と推定され、周溝から土師器坏と少量の埴輪片が出土した。遺物から６世紀前葉の築造と推定された（埼埋文前掲書)。

尾根支群

駒込支群の西側至近距離に位置する。11基が確認されており、標高約70mの丘陵斜面に築造され、駒込支群よりも古墳の集中域がより高所にある。斜面裾にも存在した可能性はあるが、現存する古墳はない。平成３年度に第５号墳が、平成５年度に第10号墳が嵐山町教育委員会により調査された。第５号墳は墳丘の半分が調査され、規模は直径約20mと推定されている。埴輪列が検出され、主体部は粘土槨または石槨と思われる。10号墳は直径約18mの円墳で、埴輪列が検出された。６世紀中葉から後半の築造と考えられている。

尾根西支群

尾根西支群は、尾根支群の南西側に形成され、破壊により墳丘は確認できないが３基の古墳の存在が想定されている。

上土橋支群

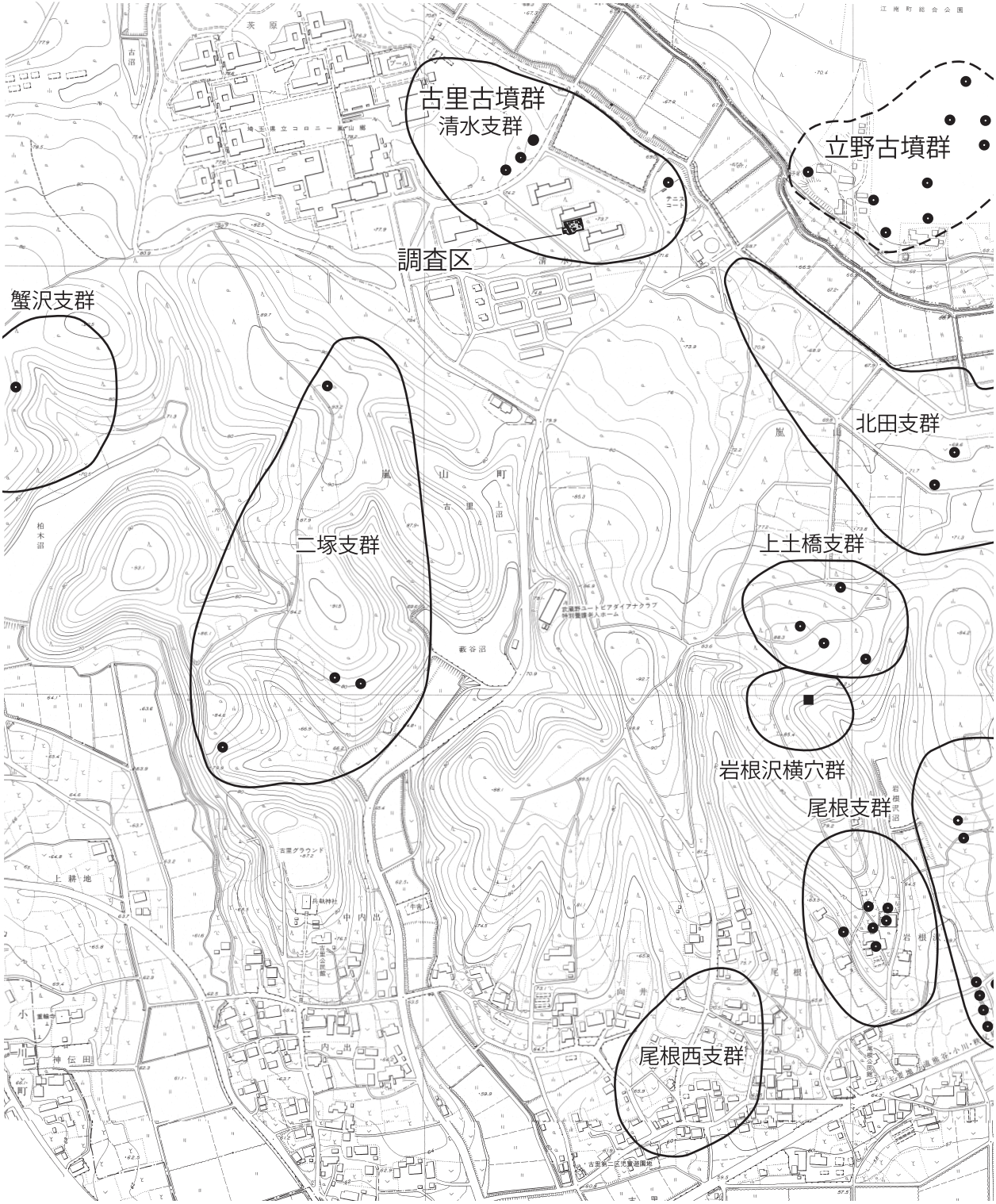
上土橋支群は尾根支群の北側にあり、丘陵の頂点からやや北に傾斜した地点に展開する。４基の円墳が確認され、１号墳は昭和61年度に嵐山町遺跡調査会によって発掘調査されている。円墳と思われる周溝の一部が検出され、須恵器片（提瓶

か？）が出土した（嵐山町遺跡調査会1987）。

北田支群

北田支群は、古里古墳群の北東側にあり、和田川に面した低丘陵上に立地している。５基が確認されているが、熊谷市（旧江南町）塩古墳群西原支群と分布域が重複している。１～３号墳は昭和60年度、嵐山町教育委員会により発掘調査された。

２号墳は直径12.2～15.5m、高さ3.4mの円墳で、周溝は全周する。主体部は凝灰岩切石切組積みの胴張形横穴式石室である。奥壁と天井部には



第３図　古里古墳群古墳分布図（１）

大型の切石を１枚使用し、側壁には切石を丁寧に並べていた。南比企産の須恵器提瓶片と須恵器大甕片が出土した。埴輪は検出されず、７世紀前半の築造と推定される。３号墳は主体部の一部が露出していた。凝灰岩切石積の横穴式石室で、最下部のみ遺存していた。

塩古墳群

塩古墳群は北田支群と一部重複しつつ東側に展開する。滑川左岸にⅠ～Ⅴ・Ⅶ支群の６支群が、和田川右岸にⅡ支群の一部とⅥ支群が位置し、98

第４図　古里古墳群古墳分布図（２）

基の古墳から構成される（江南町1995）。古墳時代前期から形成される古墳群で、前方後方墳や方墳（方形周溝墓）を含むことが特徴である。後期古墳も存在するため、大きくみると塩古墳群から古里古墳群へ変遷するが、詳細は調査例の増加を待って検討する必要がある。

2　調査区の概要

古里古墳群清水支群は、埼玉県比企郡嵐山町大字古里の埼玉県立嵐山郷内に所在する。比企丘陵の北端部に位置し、東西に延びる尾根の北東に傾斜する斜面に立地する。北側には和田川が東流し、その北側は江南台地が広がっている。南側には滑川に開析された樹枝状の地形が広がっている。

清水支群は現在までに４基の古墳が確認されている。いずれも埼玉県立嵐山郷の敷地内にあり、２基は墳丘が残存している。

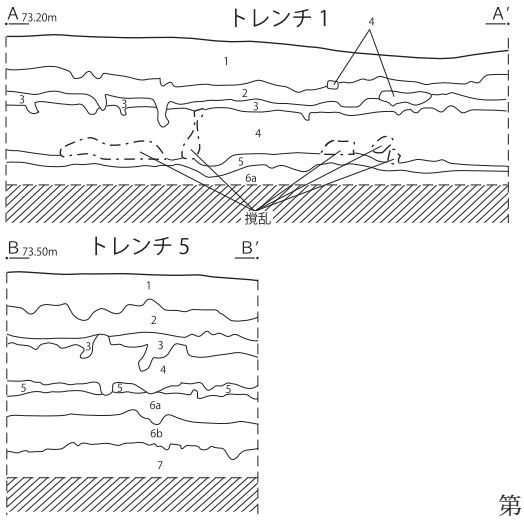
今回の調査で検出された遺構は、古墳時代後期の溝跡２条、土壙７基、ピット23基である。調査区は東西に長い不整長方形で、調査面積は264㎡、標高は72～74mである。調査区の地形は西から東、調査区北側では北東に向かって傾斜しており、調査区内で0.8mの比高差がある。

まず、調査区の基本層序は第５図に示した。第１層はローム漸移層で、黒色腐植土層は発達していない。縄文時代の土器と石器が含まれる。第２層は遺構確認面としたソフトローム層で、地表から0.2～0.4mの深さである。第３層はハードローム層、第４層は第１暗色帯で、白色パミスを多く含む。第５層はいわゆるAT層（姶良・丹沢火山灰層）と考えられる。第６層は第２暗色帯に相当する。赤色パミスが含まれ、上下２層に分かれる。第７層は灰白色粘質土で、武蔵野台地の第Ｘ層対応層と考えられる。

溝跡は２条あり、第１号溝跡からは古墳時代後期の土師器長甕が投棄されたような状態で出土した。古墳の可能性を考えたが、現状で古墳の一部と想定することは難しかった。第２号溝跡は浅い溝跡で古墳時代後期の土器片が少量出土した。性格は不明である。

土壙は７基検出された。第６・７号土壙は第１号溝跡底面から掘り込まれていた。２基ともに規模・形態が類似していた。溝掘削直後または、掘削後あまり期間を置かずに掘り込まれたものと推定された。墓壙が想起されたが、断定には至らなかった。いずれにせよ、第１号溝跡に関連する性格と思われる。

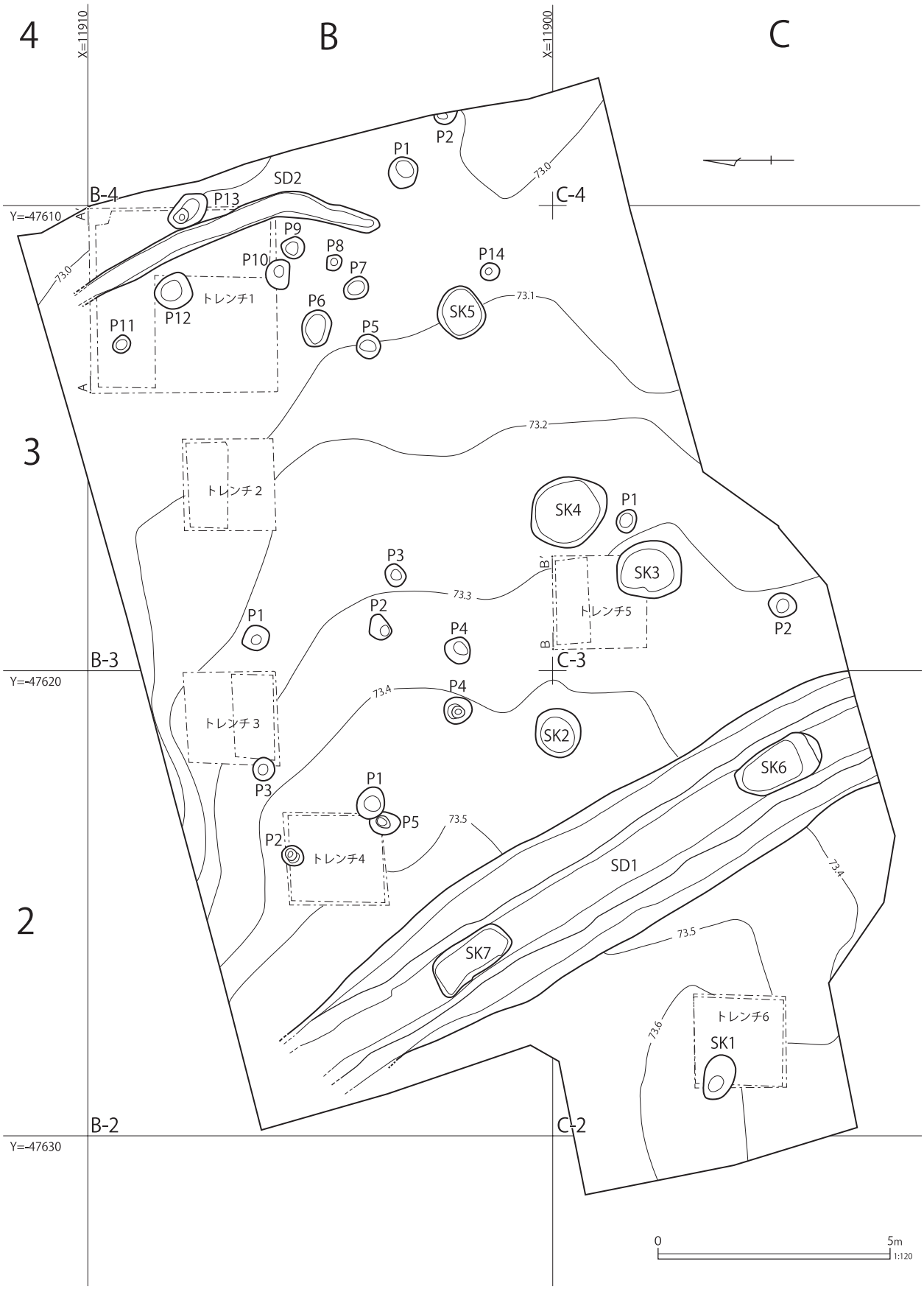
ピットは23基検出された。規則的に並ぶものはなく、柱痕も認められなかった。



トレンチ１・５
1　暗褐色土　褐色土主体　ローム粒子含む　漸移層　しまり弱い　粘性やや弱い
2　黄褐色土　ソフトローム層　ローム土主体
ブラックバンドのブロック含む（φ5～10cm）
しまりやや強い　粘性あり
3　黄褐色土　ハードローム層　ブラックバンド混じる
しまりやや強い　粘性あり　やや硬くしまっている
4　明黄褐色土　第１暗色帯（ブラックバンド１）　白色パミス多く含む
赤色パミス混在　ローム粒子多量混在
しまり強い　粘性ややあり　非常に硬い
5　褐色土　AT層　黄褐色粒子含む　明るい　しまりややあり　粘性強い
6a　暗褐色土　第２暗色帯（ブラックバンド２）　炭化粒子多く含む
赤色パミス混入　チョコレート色　しまりやや強い　粘性ややあり
6b　暗褐色土　第２暗色帯（ブラックバンド２）　炭化粒子多く含む
赤色パミス混入　チョコレート色
6aに比べてやや明るい　硬くしまっている
7　灰白色土　武蔵野台地第Ｘ層対応　灰色粘土　しまり強い　粘性強い　硬質

0　2m
1:60

第５図　基本土層図


4
B
C
X=11910
X=11900
B-4
C-4
Y=-47610
SD2
P13
P1
P2
P9
P8
P10
P7
P14
P12
トレンチ1
P6
SK5
P11
P5
73.0
73.1
3
73.2
トレンチ2
SK4
P1
SK3
P3
73.3
P2
P1
P4
トレンチ5
P2
B-3
C-3
Y=-47620
73.4
P4
トレンチ3
SK2
SK6
P3
P1
P5
73.5
P2
トレンチ4
SD1
73.4
2
73.5
SK7
73.6
トレンチ6
SK1
B-2
C-2
Y=-47630
0
5m
1:120

第６図　全体図

Ⅳ　遺構と遺物

１　古墳時代から古代の遺構と遺物

（１）　溝跡

第１号溝跡（第７・８図）

第１号溝跡は調査区西端のＢ２・Ｃ２グリッドに位置する。北北西から南南東方向にほぼ直線的に延び、両端は調査区外に抜けている。走向方位は北から約30°西に振れている。地形的には西から東に傾斜しており、概ね地形に平行して掘削されていた。残存長は14.40m、最大幅は中央部で3.00m、北側で1.98m、南端部で2.52mである。深さは0.81～1.05mである。

底面は二段に掘り込まれ、二段目の掘り込みは幅1.2～1.5mで、その両側にテラス状の緩斜面が設けられている。底面は平坦で、ロームブロックが充填されたような貼床状の堆積状況であった。底面の標高は、北側で72.77m、南側で72.53mと0.24m南側が僅かに低くなっている。

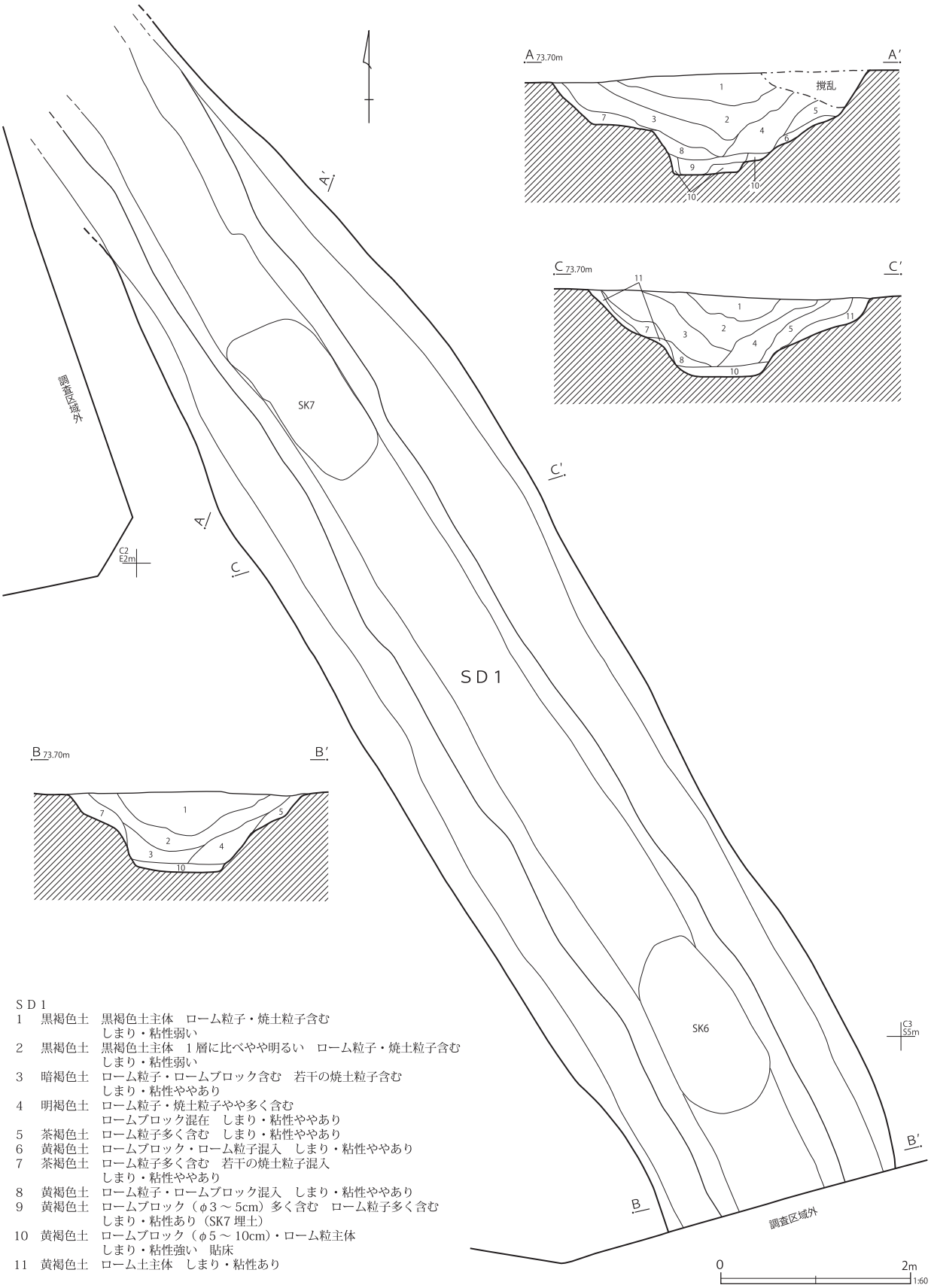
溝内からは楕円形の土壙が２基検出された（第６・７号土壙）。溝の二段目の掘り込みに軸を合わせるように掘り込まれていた。溝の埋土が土壙覆土を覆っていたため、埋没段階では溝の方が新しいと考えられた。但し、土壙が溝跡と無関係に掘られたことは考えられず、第１号溝跡掘削直後、あるいは遅くとも第１号溝跡が機能していた段階に掘り込まれたと考えられる。

土層は11層に分層された（第７図）。場所は異なっても基本的に同様な土層堆積状況であった。最下層（第10層）にはロームブロックとローム粒子混じりの黄褐色土が堆積し、貼床状に硬く踏み固められていた。第７号土壙との重複箇所では、第10層を一部切り込む形で土壙が掘り込まれていた（第９層）。第９層堆積後は、まず溝の東側から埋没し（第４・５層）、その後西側から堆積した状況が観察された（第３・７・８層）。ローム粒子やロームブロックが多く含有されていた。最終堆積はローム粒子・焼土粒子混じりの黒色土で埋没していた。

出土遺物は土師器坏・甕・台付甕・甑、須恵器坏・甕がある（第９図）。その他に縄文土器・石器、近世以降の陶磁器片が出土している（第14～17図）。

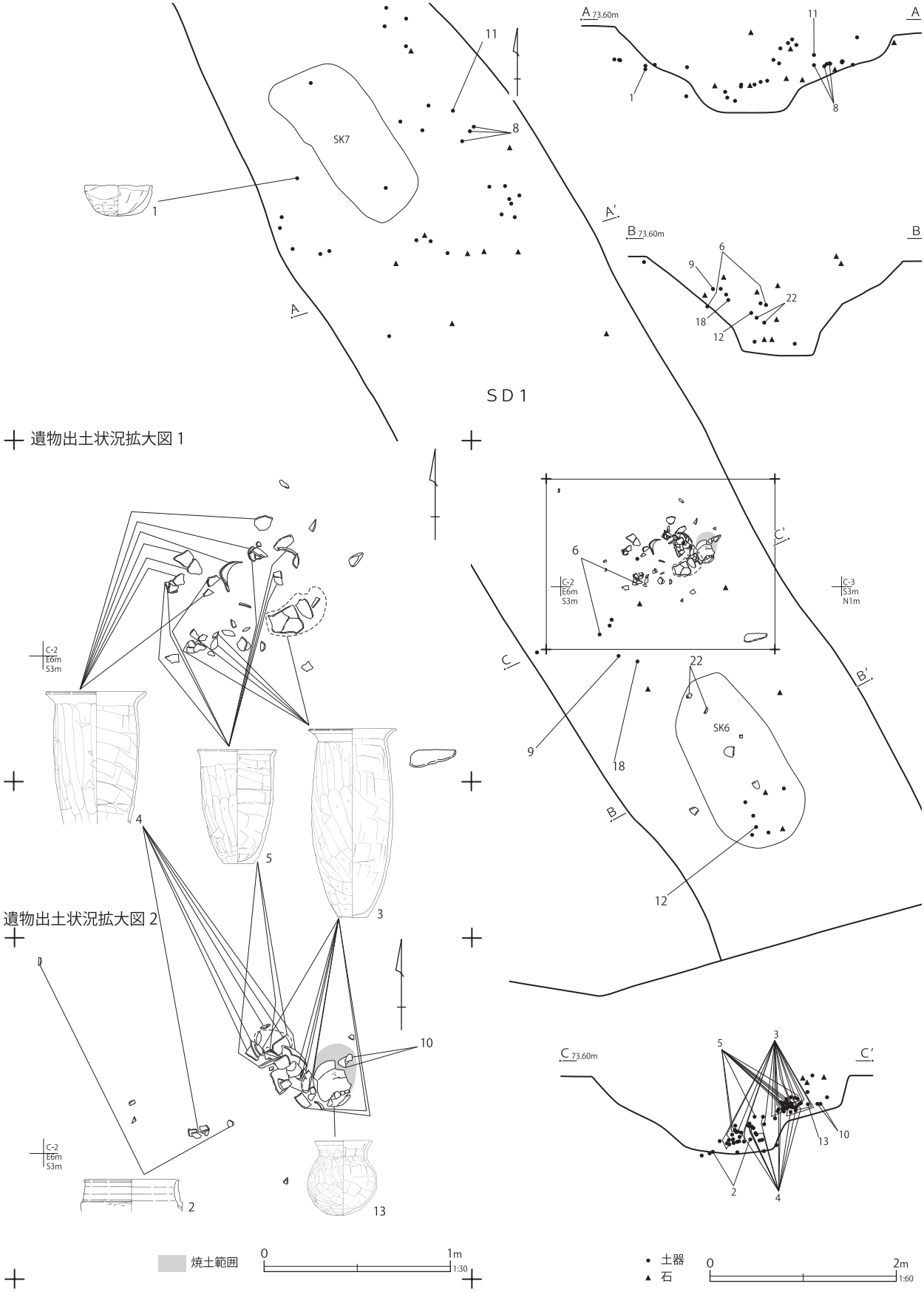
古墳時代後期の遺物が主体を占め、奈良時代の土器が若干含まれていた。古墳時代後期の遺物の中で遺存率の高い第９図３～５の土師器甕と13の小型甕は、溝跡中央よりやや南に寄った位置で東岸から壁に沿って投げ込まれたような状況で出土した（第８図）。13の小型甕直下の壁との間隙には焼土塊が検出されたが、その場で被熱したものではないことが判明した。おそらく甕と共に溝中に投棄されたと推定される。奈良時代の遺物は須恵器坏と土師器台付甕破片が出土した（第９図17～22）が、埋没過程の混入と考えられる。土師器台付甕（22）は第６号土壙と溝跡の破片が接合したが、出土位置から溝跡覆土から出土したと判断される。

第９図１は粗製の土師器坏で口縁部に雑なヨコナデは施されるが、形態が歪んでいる。２は有段口縁の鉢である。３～12は土師器甕、13は丸底風の小型甕である。３は長甕で器高40.4㎝、胴部中位が緩やかに膨らみを持ち、胴部最大径は口径よりも僅かに小さい。長胴甕の中でも器高40㎝に及ぶ例は少なく、最も長胴化が進行した段階と捉えることができる。４は胴部下半を欠くが、３同様の長甕である。胴部のふくらみは弱く、最大径は口縁部にある。５は小型の長胴甕である。口縁部のくびれは弱く、小さく外反する。砲弾形に近い器形で、器高は24.2㎝である。13は丸底風の小型甕で、強く被熱している。14～16は土師器甑である。遺物の時期は古墳時代後期、７世紀前半～中

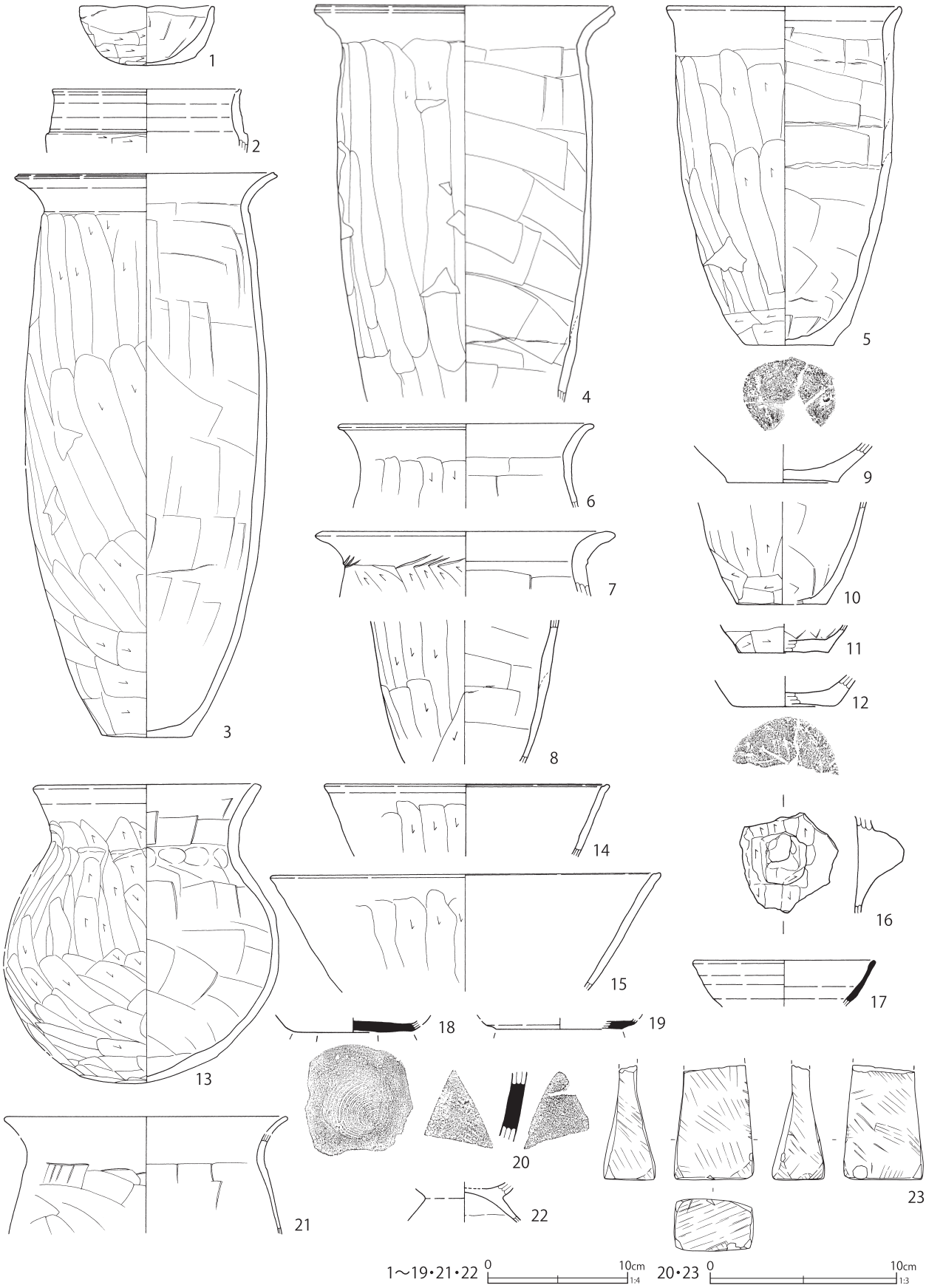


ＳＤ１
1　黒褐色土　黒褐色土主体　ローム粒子・焼土粒子含む
　　しまり・粘性弱い
2　黒褐色土　黒褐色土主体　１層に比べやや明るい　ローム粒子・焼土粒子含む
　　しまり・粘性弱い
3　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック含む　若干の焼土粒子含む
　　しまり・粘性ややあり
4　明褐色土　ローム粒子・焼土粒子やや多く含む
　　ロームブロック混在　しまり・粘性ややあり
5　茶褐色土　ローム粒子多く含む　しまり・粘性ややあり
6　黄褐色土　ロームブロック・ローム粒子混入　しまり・粘性ややあり
7　茶褐色土　ローム粒子多く含む　若干の焼土粒子混入
　　しまり・粘性ややあり
8　黄褐色土　ローム粒子・ロームブロック混入　しまり・粘性ややあり
9　黄褐色土　ロームブロック（φ３～５cm）多く含む　ローム粒子多く含む
　　しまり・粘性あり（SK7 埋土）
10　黄褐色土　ロームブロック（φ５～10cm）・ローム粒主体
　　しまり・粘性強い　貼床
11　黄褐色土　ローム土主体　しまり・粘性あり

第７図　第１号溝跡



第８図　第１号溝跡遺物出土状況



第９図　第１号溝跡出土遺物

第２表　第１号溝跡出土遺物観察表（第９図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	9.3	4.2	4.0	DGIK	50	良好	橙	№125　外面ケズリ　内面ヘラナデ　雑な整形　口縁歪む	5-1
2	土師器	鉢	(13.2)	[4.5]	—	CDI	5	普通	明赤褐	№84・141　接合しない２片　口径不安定　黒色処理か	
3	土師器	甕	18.0	40.4	6.5	ADEGI	60	普通	橙	№37・41・42・44・63・65・67・88・90・91他　外面強く被熱	4-1
4	土師器	甕	(20.8)	[28.3]	—	ACDGIK	50	普通	浅黄	№45・47~49・52・62・78他　胴部外面中位以下は被熱か	4-2
5	土師器	甕	(16.6)	24.2	6.2	CDIKL	60	普通	にぶい黄橙	№46・50・51・71~74・89他　底部木葉痕　口縁歪みあり	4-3
6	土師器	甕	(17.8)	[6.0]	—	CDGI	25	普通	にぶい黄橙	№13・19	5-2
7	土師器	甕	(20.0)	[4.6]	—	DEGHIL	15	普通	にぶい黄橙		
8	土師器	甕	—	[10.1]	—	CDHIK	30	普通	にぶい黄橙	№117・118・135	
9	土師器	壺	—	[2.8]	(7.8)	ADGIL	30	不良	橙	風化のため調整不明	
10	土師器	甕	—	[7.2]	(6.4)	ACDGIK	25	普通	にぶい黄橙	№137・143	5-3
11	土師器	甕	—	[2.0]	6.4	DEGI	70	普通	橙	№116	
12	土師器	壺	—	[2.2]	(7.2)	CDGI	45	普通	浅黄橙	№15　底部木葉痕	
13	土師器	小型甕	15.4	21.7	—	CDEGIL	65	普通	にぶい黄橙	№111　胴部上半強く被熱　底部周辺黒斑	4-4
14	土師器	甑	(20.0)	5.1	—	CDGIK	15	良好	にぶい橙	小型甑	
15	土師器	甑	27.2	8.3	—	CDGIK	10	普通	にぶい橙	煤付着	
16	土師器	甑	—	6.1	—	CDEGIK	5	普通	にぶい黄橙	甑把手	
17	須恵器	坏	(12.8)	3.3	—	DIJK	10	良好	灰	南比企産　口径不安定　８ｃ中葉頃か	
18	須恵器	坏	—	[0.8]	(8.4)	DIJ	80	良好	緑灰	南比企産　底部回転糸切後周辺回転ヘラケズリ	
19	須恵器	坏	—	[0.7]	(9.0)	DJ	5	良好	灰	南比企産　底部回転ヘラケズリ　底径不安定	
20	須恵器	甕	—	—	—	DIJ	5	良好	黄灰	南比企産　外面平行叩き　内面当具ナデ消し	
21	土師器	甕	—	[7.0]	—	CDGJK	15	良好	橙	武蔵型甕　口縁欠失	
22	土師器	台付甕	—	[2.8]	—	CDGIK	70	良好	にぶい橙	№54・SK６－№１　脚部片　武蔵型と思われる	
23	石器	砥石	長さ［6.2］　幅4.3　厚さ2.8　重さ82.8ｇ							凝灰岩　底面工具痕　側面使用痕	

葉頃に位置付けられる。

17～19の須恵器坏は南比企産で、８世紀前半～中頃の所産と思われる。土師器甕(21)・台付甕（22）は武蔵型甕で、須恵器とほぼ同時期と推定される。

第１号溝跡は古墳時代後期（７世紀前半～中葉頃）に掘削され、奈良時代（８世紀前半～中頃）にかけて埋没したと考えられる。砥石（23）はいずれかの時期に属すのであろう。

第２号溝跡（第10図）

第２号溝跡は調査区東端のＢ－３・４グリッドに位置する。北端は調査区外に延び、南端は調査区内に収まる。北北西から南南東に向かって延び、南端部は緩やかに弧を描くように屈曲する。規模は長さ6.64m、幅は0.48～0.51m、深さは0.03～0.10mである。浅く短い溝跡で、断面形は皿状である。

埋土はローム粒子を含む暗褐色土で大きな土層変化は観察されなかった。

出土遺物は少なく、古墳時代後期の土師器甕・坏の口縁部細片が出土した。実測可能な遺物はない。第１号溝跡と大きな時期差はないと考えられる。

（２）土壙

第１号土壙（第11図）

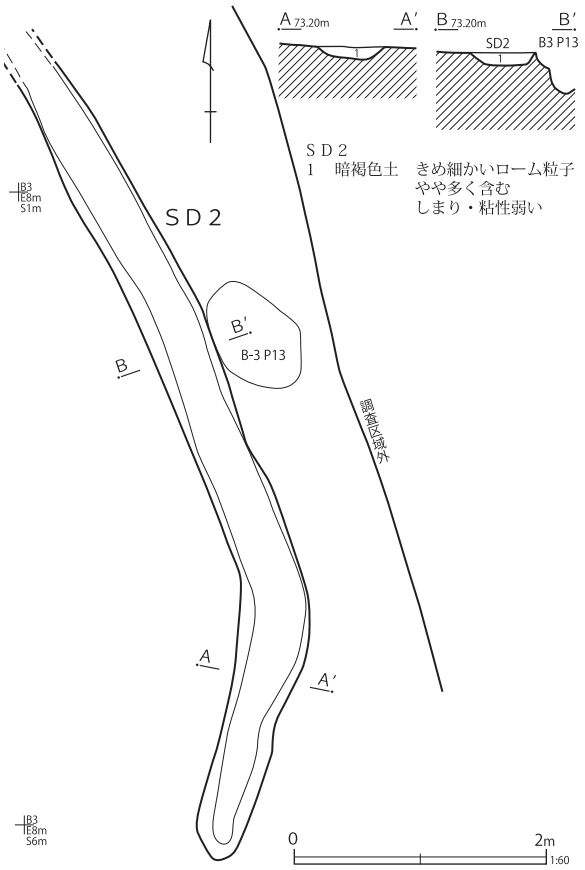
第１号土壙は調査区西端部のＣ－２グリッドに位置する。楕円形の平面形態で、規模は長径1.0m、短径0.65m、深さ0.43mである。長軸方位はＮ－68°－Ｗを指す。底面は西側が深く、東側に向かって徐々に浅くなっている。

埋土は４層に分かれ、第４層にロームが多量に含まれていた。堆積環境は不明である。

遺物は土師器坏細片が１点ある。古墳時代後期と思われるが、詳細は不明である。

第２号土壙（第11図）

第２号土壙は第１号溝跡の東側、Ｂ・Ｃ－２グリッドに位置する。形態は円形で、規模は直径



第10図　第２号溝跡

1.10×1.02m、深さ0.27mである。断面形は皿状で、底面は緩やかに湾曲する。

埋土はきめ細かいローム粒子・ロームブロックを含む明褐色土単層で、大きな土層変化は観察されなかった。

出土遺物は縄文土器細片と土師器甕の胴部小片がある。古墳時代後期の所産と推定される。

第３号土壙（第11図）

第３号土壙は調査区中央南のＣ－３グリッドに位置する。形態は略円形で、規模は長径1.43m、短径1.26m、深さ0.22mである。断面形は浅い鍋底状である。土層は３層に分かれ、第１層が暗褐色土、下層の第２・３層が黄褐色土である。自然堆積か否かは判断できなかった。

出土遺物は土師器坏口縁部と甕胴部小片がある。時期は古墳時代後期と推定される。

第４号土壙（第11図）

第４号土壙は第３号土壙の北東側約0.7m、Ｂ・Ｃ－３グリッドに位置する。形態は略円形で、規模は直径1.83×1.51m、深さ0.20mである。断面形は浅い皿状である。埋土は２層に分かれ、第１層は暗褐色土、第２層はローム土を含む黄褐色土であった。

出土遺物は土師器甕胴部小片がある。古墳時代後期と推定される。

第５号土壙（第11図）

第５号土壙は調査区東寄りのＢ－３グリッドに位置する。略円形の平面形態で、規模は直径1.10×0.97m、深さ0.11mである。断面形は浅い皿状である。

覆土は暗褐色土単層で、大きな土層変化は観察されなかった。ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子が含まれていた。

出土遺物は検出されなかった。

第６号土壙（第11図）

第６号土壙は第１号溝跡内のＣ－２グリッドに位置する。形態は楕円形で、規模は長軸長1.92m、短軸長0.96m、深さ0.43mである。長軸方位はＮ－29°－Ｗである。土壙は、溝幅底面にほぼ完全に収まるように掘り込まれていた。主軸は溝の延長方向に一致する。短辺側壁は直角に立ち上がっていた。

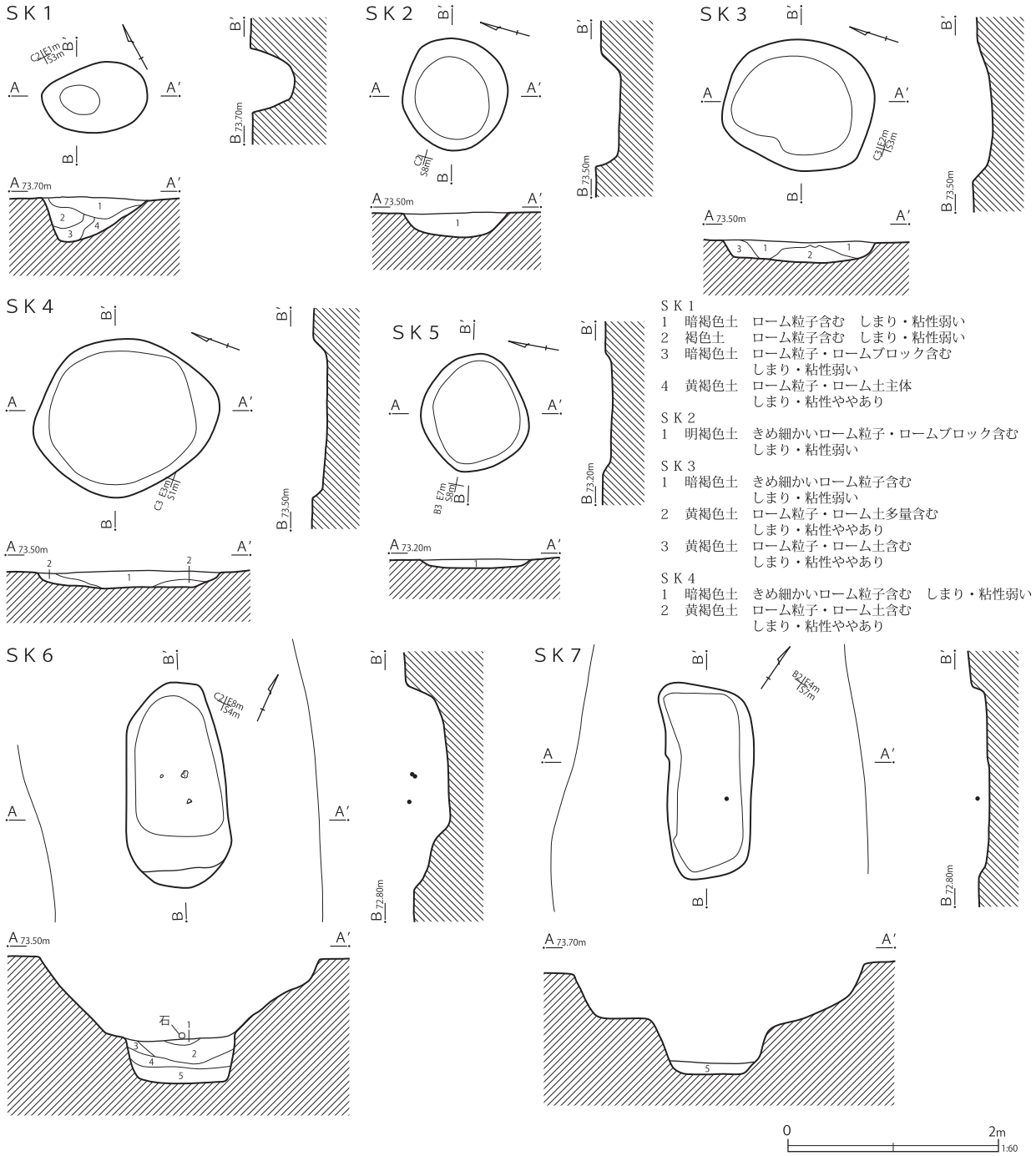
第１号溝跡の底面に第６号土壙の輪郭が確認された。また断面観察から、第１号溝跡底面の貼床状堆積土（第５層）を切り込んでいることが判明した。堆積状況や位置関係から第１号溝跡掘削直後か、さほど期間を置かずに掘削され、その後、溝跡の堆積土が上部を覆ったと考えられる。

出土遺物は土師器甕と台付甕小片が出土した。第１号溝跡出土の台付甕（第９図22）は奈良時代の所産と考えられる。平面的には土壙内と溝跡の破片が接合したが、垂直分布から溝埋没過程で混入した可能性が高い（第８図）。土壙自体は古墳時代後期に属すると考えられる。土壙北側１mから出土した土師器甕類も無関係ではなかろう。

第７号土壙（第11図）

第７号土壙は第１号溝跡内のＢ－２グリッドに位置する。形態はやや崩れた隅丸長方形で、規模は長軸長1.91m、短軸長0.78m、深さ0.42mである。長軸方位はＮ－32°－Ｗで、溝跡の延長方向と一致する。短辺の側壁は垂直に立ち上がっていた。

第６号土壙と規模・形態が類似し、同様の溝内土壙と考えられる。第６号土壙は貼床状堆積土が土壙下面に残っていたが、第７号土壙は貼床状堆



ＳＫ１
1　暗褐色土　ローム粒子含む　しまり・粘性弱い
2　褐色土　ローム粒子含む　しまり・粘性弱い
3　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック含む　しまり・粘性弱い
4　黄褐色土　ローム粒子・ローム土主体　しまり・粘性ややあり

ＳＫ２
1　明褐色土　きめ細かいローム粒子・ロームブロック含む　しまり・粘性弱い

ＳＫ３
1　暗褐色土　きめ細かいローム粒子含む　しまり・粘性弱い
2　黄褐色土　ローム粒子・ローム土多量含む　しまり・粘性ややあり
3　黄褐色土　ローム粒子・ローム土含む　しまり・粘性ややあり

ＳＫ４
1　暗褐色土　きめ細かいローム粒子含む　しまり・粘性弱い
2　黄褐色土　ローム粒子・ローム土含む　しまり・粘性ややあり

ＳＫ５
1　暗褐色土　きめ細かいローム粒子・炭化粒子・焼土粒子含む　しまり・粘性弱い

ＳＫ６・ＳＫ７
1　暗黄褐色土　暗褐色土含む　ローム粒子混在　しまり・粘性弱い
2　黄褐色土　ローム粒子・ロームブロック（φ１～３㎝）主体　しまり・粘性ややあり
3　黄褐色土　ローム粒子・ロームブロック（φ１～３㎝）主体　２層に比べややロームブロック多い　しまり・粘性やや強い
4　暗黄褐色土　暗褐色土混在　ややきめ粗いローム粒子・ロームブロック（φ１～３㎝）多量含む　炭化粒子混在　しまり・粘性ややあり
5　黄褐色土　ローム粒子・ロームブロック（φ３～10cm）含む　しまり強い　貼床埋土

第11図　土壙

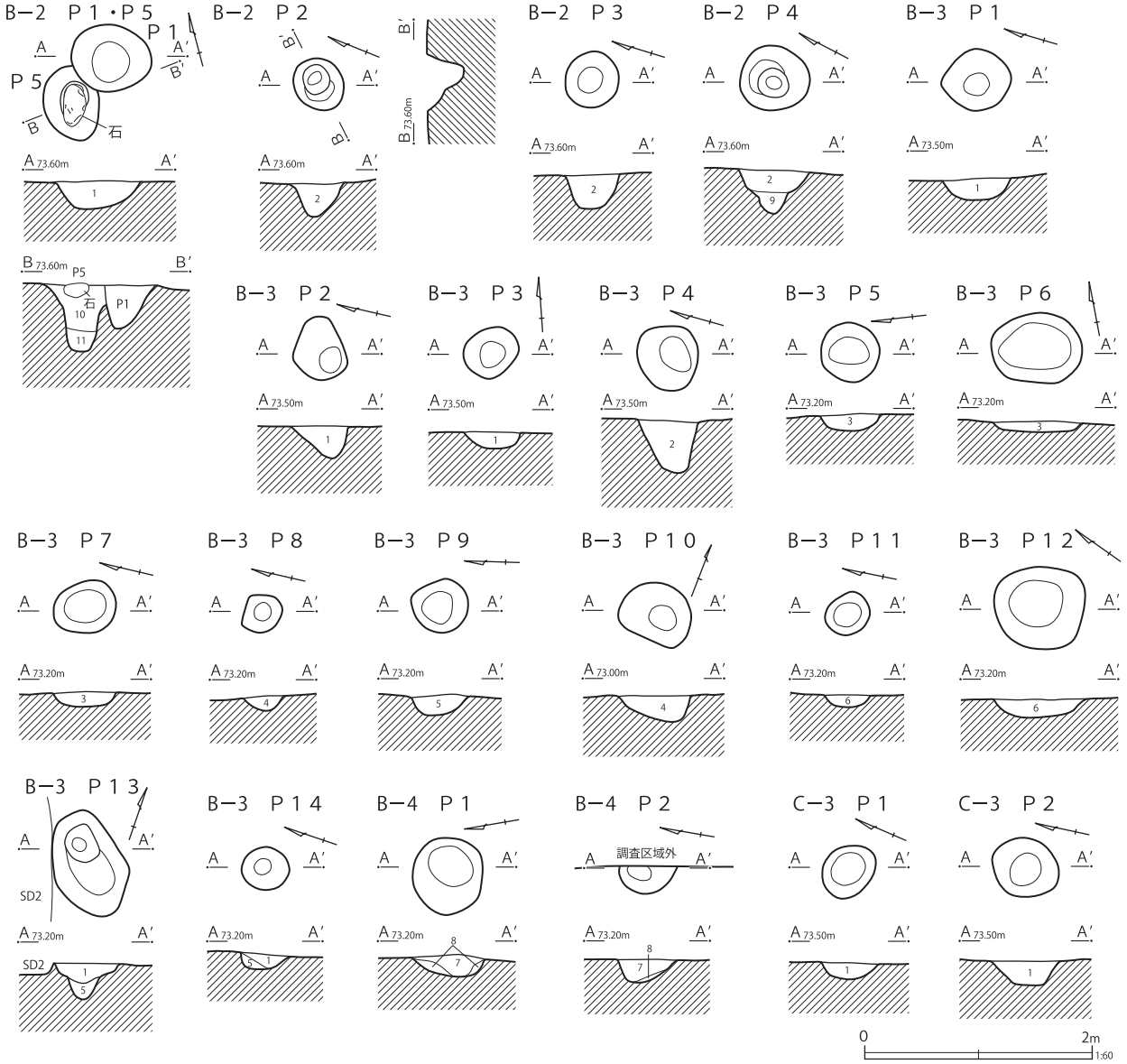
積土を掘り抜く部分と、貼床状堆積土を残す部分があった（第７図Ａ－Ａ′断面）。埋土はロームを含む黄褐色土であった。第６号土壙と同様の規模を有する溝内土壙である。おそらくほぼ同時期に掘削されたと考えられる。

出土遺物は土師器甕小片があるが、第１号溝跡埋土中から検出されたもので、直接土壙に伴うものではない。

（３）ピット（第12図）

ピットは23基検出された。第１号溝跡の東側にあるが、規則的に配置される箇所は認められない。また、断面観察によっても柱痕は検出されず、建物跡は抽出できなかった。規模は第３表に記載した。

出土遺物はごく少なく、古墳時代後期の有段口縁坏がＢ－３グリッドＰ12から、土師器台付甕脚部がＢ－３グリッドＰ10から出土した（第13図１・２）。７世紀前半頃のものと推定される。



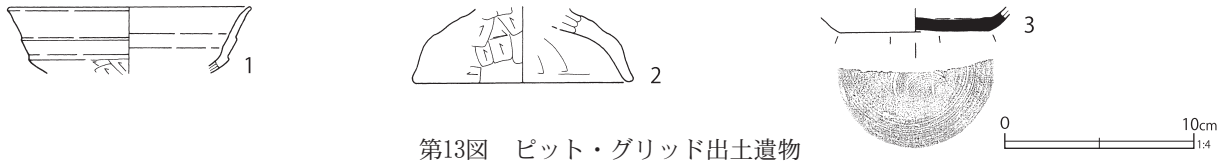
1　暗褐色土　きめ細かいローム粒子含む　しまり・粘性弱い
2　暗褐色土　きめ細かいローム粒子少量含む　しまり・粘性弱い
3　暗褐色土　きめ細かいローム粒子含む　しまり・粘性やや弱い
4　暗褐色土　きめ細かいローム粒子・ロームブロック含む　しまり・粘性やや弱い
5　暗褐色土　きめ細かいローム粒子・ロームブロック含む　しまり・粘性弱い
6　褐色土　きめ細かいローム粒子含む　しまり・粘性弱い
7　暗褐色土　きめ細かいローム粒子・炭化粒子含む　しまり・粘性弱い
8　黄褐色土　ローム粒子・ロームブロック含む　しまり・粘性ややあり
9　褐色土　きめ細かいローム粒子・ローム土を含む　しまり・粘性弱い
10　黒色度　きめ細かいローム粒子含む　ロームブロック混在　しまり・粘性弱い
11　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック含む　しまり・粘性弱い
12　暗褐色土　きめやや粗いローム粒子・ロームブロック含む　しまり・粘性弱い

第12図　ピット

第３表　ピット一覧表

位置	番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
Ｂ－２グリッド	Ｐ１	72.2	61.0	23.6
	Ｐ２	48.9	43.3	31.3
	Ｐ３	51.2	47.6	30.4
	Ｐ４	63.2	58.5	37.9
	Ｐ５	67.5	49.4	58.6
Ｂ－３グリッド	Ｐ１	62.4	55.6	20.4
	Ｐ２	56.4	45.8	30.1
	Ｐ３	48.7	42.2	15.9
	Ｐ４	58.5	53.7	49.5
	Ｐ５	53.1	51.4	14.5
	Ｐ６	80.8	63.5	10.1
	Ｐ７	56.4	46.7	12.2

位置	番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
Ｂ－３グリッド	Ｐ８	39.2	35.1	14.9
	Ｐ９	51.4	48.8	20.4
	Ｐ10	64.8	51.8	26.7
	Ｐ11	40.7	35.1	9.0
	Ｐ12	81.1	73.2	19.2
	Ｐ13	96.9	63.8	32.2
	Ｐ14	41.5	37.7	16.6
Ｂ－４グリッド	Ｐ１	68.4	60.7	18.6
	Ｐ２	47.9	[24.0]	18.0
Ｃ－３グリッド	Ｐ１	51.7	42.6	14.6
	Ｐ２	62.7	52.9	25.0



第13図　ピット・グリッド出土遺物

第４表　ピット・グリッド出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	グリッド	備考
1	土師器	坏	(12.6)	[3.4]	—	CDI	5	良好	にぶい黄橙	Ｂ－３	Ｐ-12　有段口縁坏 口径は不安定
2	土師器	小型台付甕	—	[3.9]	(11.2)	ADGHK	10	普通	にぶい黄橙	Ｂ－３	Ｐ-10　整形やや雑
3	須恵器	坏	—	[1.2]	8.0	DIJ	50	良好	青灰	Ｃ－２	南比企産　底部糸切後回転ヘラケズリ

（４）グリッド出土遺物（第13図）

第13図３はＣ－２グリッド出土の須恵器坏底部片である。内面は摩滅していた。底部は回転糸切り後回転ヘラケズリ調整されている。奈良時代（８世紀中頃～後半頃）のもので南比企産である。

２　その他の遺物

（１）縄文時代の遺物

縄文土器（第14図１～54）

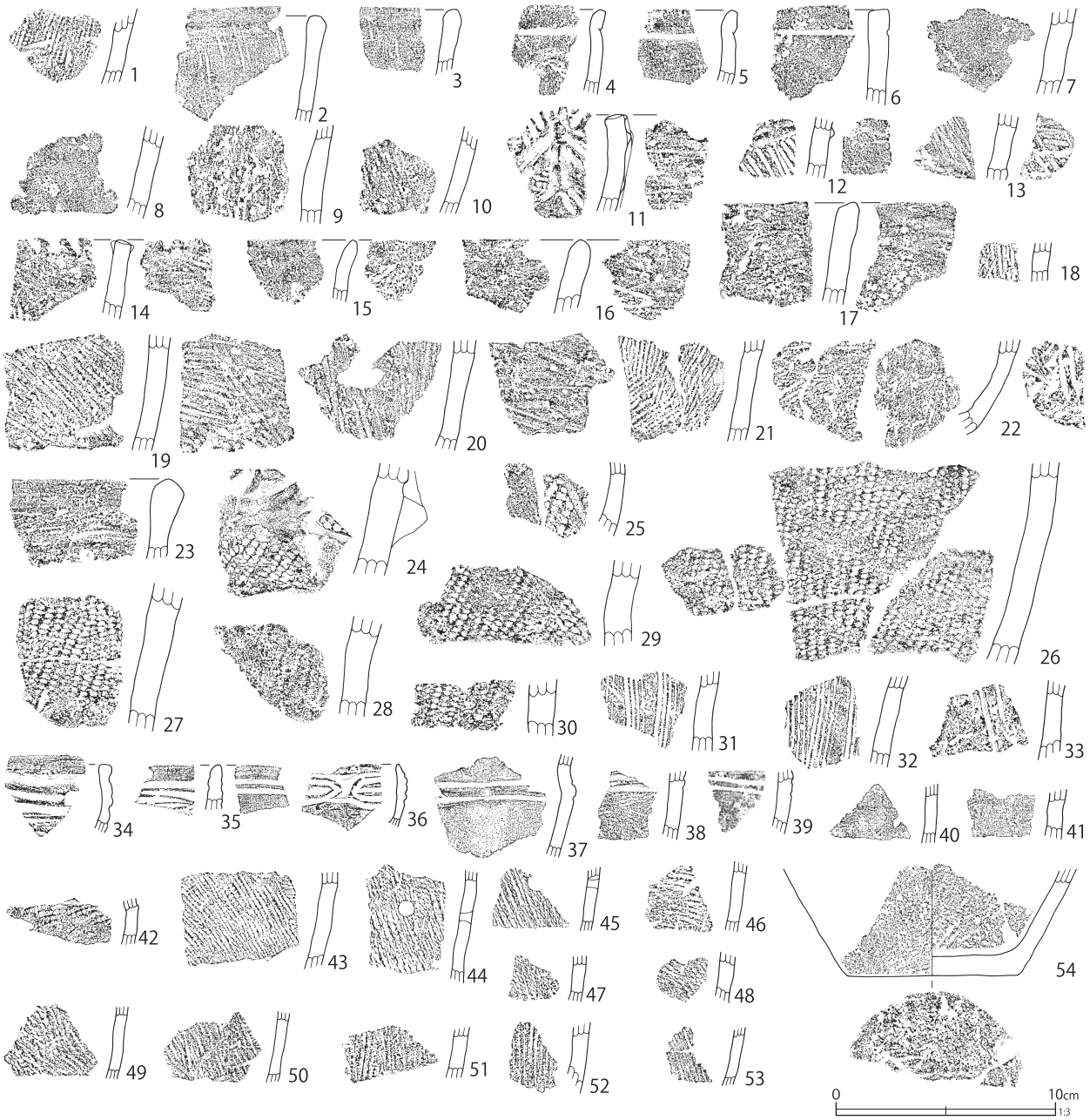
グリッドからは、早期初頭から晩期終末までの土器群が出土している。

１～10は早期初頭の撚糸文系土器群である。１は細密なRL縄文を施す井草Ⅰ式土器の胴部破片である。２、３は間隔の空く撚糸条線を施文する稲荷台式土器である。４～10は口縁部に横位の沈線１条を巡らす終末期の東山式土器である。４～６は口縁部、７～10は胴部破片である。

11～22は早期後葉の条痕文系土器群の野島式土器である。11～13は細隆起線区画内に集合沈線文を充填施文するもので、11は口縁部破片である。14から17は無文の口縁部破片で、14の口唇部には刻みを施す。18～21は胴部破片で、22は底部破片である。

23～33は中期後葉の加曽利ＥⅢ式土器である。24、25には磨消懸垂文を施文し、31～33には条線文を施文する。地文縄文は全て単節RLである。

34～54は晩期終末の浮線文系土器群である。34、35は浮線文を施文する鉢形土器で、35の口縁部裏面には２条の沈線が巡る。36はミニチュア土器である。37は２本の沈線が巡る甕形土器の肩部の破片である。外面は良く磨かれている。38、39は平行沈線を施文する深鉢の胴部破片である。40～53は胴部破片で、40、41は無文、42、43は縄文、44～49は撚糸文、50～53は条痕文を施文する。44、45は補修孔を持つ。54は無文であるが、胎土、整形等から同時期の底部破片と思われる。底部に木葉痕を残す。



第14図　縄文時代の出土遺物（土器）

第５表　出土石器観察表（第15図）

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考	図版
1	石鏃	頁岩	2.9	1.7	0.4	1.2	トレンチ１	№１	5-4
2	石鏃	チャート	1.3	1.0	0.3	0.3	トレンチ５	№１	5-4
3	石鏃	チャート	2.1	1.4	0.3	0.6	Ｂ－３グリッド	№37	5-4
4	のみ状石器	緑泥片岩	12.4	3.1	1.6	94.8	SD１	完形	5-6
5	磨石	砂岩	7.9	2.8	1.9	58.8	SD１	№16　完形	5-6
6	打製石斧	ホルンフェルス	7.4	5.1	2.8	113.9	SD２	完形	5-6
7	打製石斧	ホルンフェルス	11.7	6.1	1.7	138.1	トレンチ６	№２　分銅形　完形	5-6
8	スタンプ形石器	閃緑岩	9.9	7.5	4.4	477.1	SD１	完形	5-6
9	スタンプ形石器	閃緑岩	13.0	8.7	4.4	617.4	C－２グリッド	№15　完形	5-6
10	スタンプ形石器	砂岩	9.3	5.4	3.5	251.4	SD１	完形	5-6
11	スタンプ形石器	閃緑岩	10.2	7.0	3.8	347.2	Ｂ－３グリッド	完形	5-6

縄文時代の石器（第15図１～11）

グリッド他からは縄文時代の石器が出土している。主な遺物を図化した。

１～３は石鏃で、１は有茎鏃、２・３は無茎（凹基）鏃である。３は石鏃未製品と思われるが、スクレイパーの可能性もある。右側縁を欠損する。１は頁岩、２・３はチャートである。４は緑泥片岩製ののみ状石器である。完成品で刃部は研磨されている。５は磨石である。

６・７は打製石斧で、６はいわゆる礫斧、７は分銅形である。いずれもホルンフェルス製である。

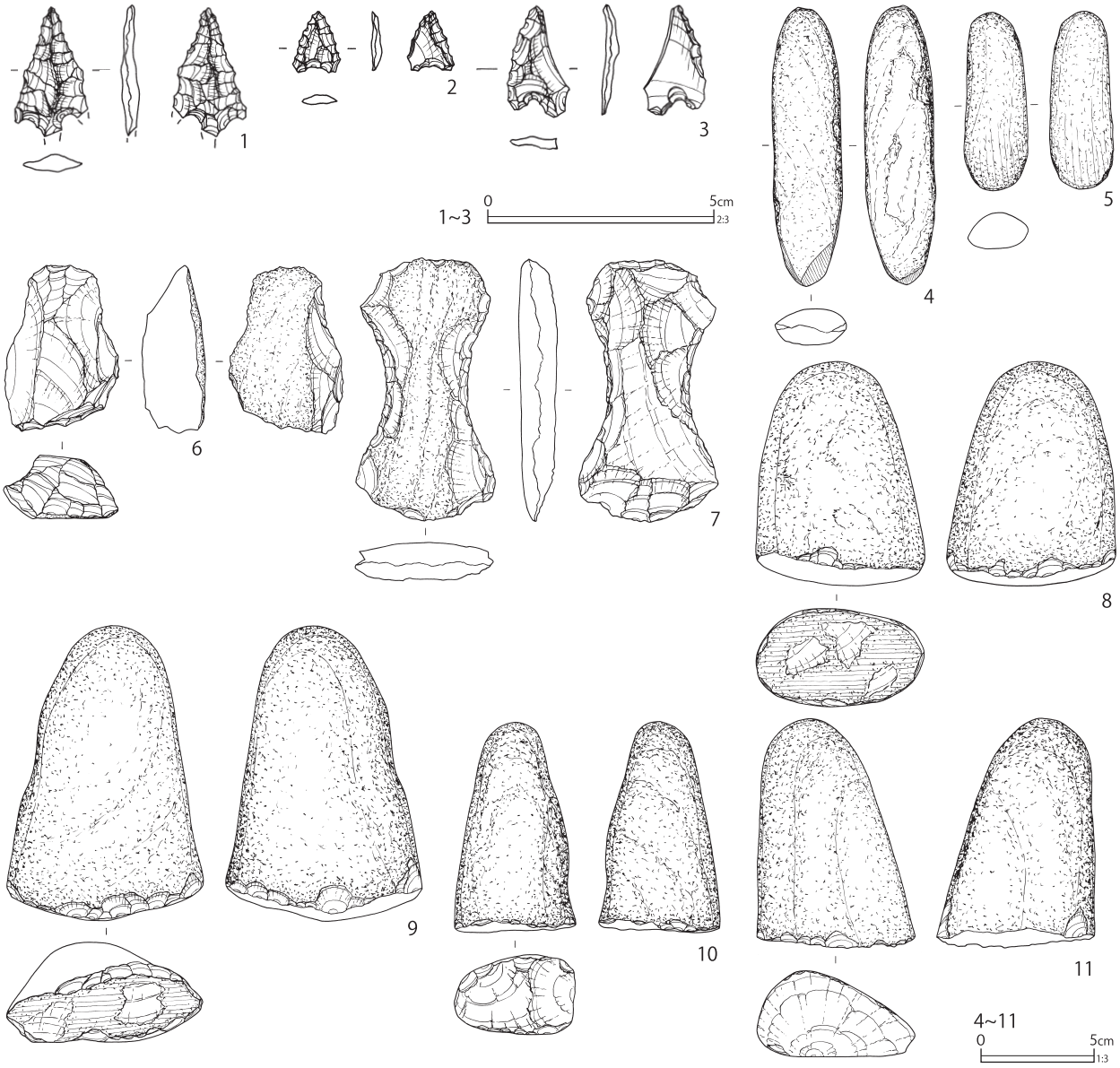
８～11はスタンプ形石器である。８・９は底面が磨られている。８・９・11は閃緑岩、10は砂岩である。

（２）近世以降の遺物

第16・17図には近世以降の出土遺物を図化した。確実に遺構に伴うものはなく、グリッドやトレンチ、表採から出土した。

１～５は瀬戸美濃系磁器である。いずれも酸化コバルトによる染付文が施釉され19世紀後葉の所産と推定される。

１は八角形皿で、染付文が施文されるが、内面



第15図　縄文時代の出土遺物（石器）

は被熱により退色している。２は皿で見込みに門松状の意匠が描かれている。高台内には「ハリ目」と呼ばれる支焼具痕が４箇所残されていた。３は筒形の坏である。内外面に酸化コバルトによる染付が付されている。４の内面には型押しの陽刻文が施文される。６は磁質の陶器鉢である。産地不明で、内外面灰釉が施釉される。

７・８は丸底風の土師質土器焙烙である。いずれも内耳が１個残存する。底部は皺状痕が残る。

９・10は土師質土器の焜炉である。10は窓が開く。

11・12は瓦質土器の竈である。12は受け皿が付く。接点のない２片から復元した。煤が付着する。

13は風炉である。抉りは推定である。外面は丁寧なミガキが施され光沢をもっている。燻されている。接点のない２片から復元した。器高は推定である。

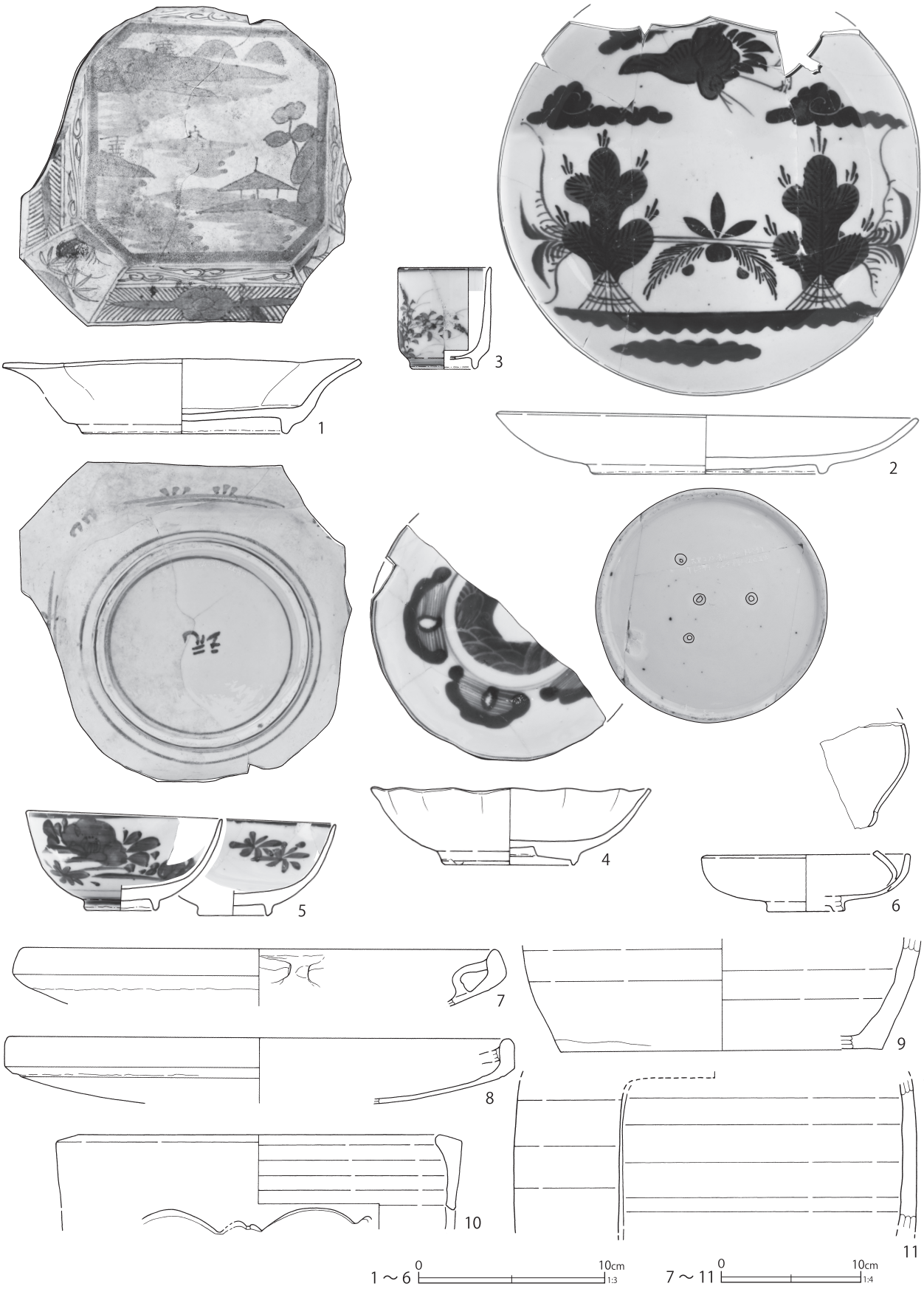
14～17は瓦質土器の火鉢である。14は外面に丁寧なミガキが施される。底面は無調整である。15は内面ミガキ、外面下端はミガキ状のナデか。燻されている。16は火鉢で獅子頭状の把手が付く。貫通孔が穿たれている。外面は桜花、木葉、幾何学文のスタンプ文が施文される。

18は焜炉で窓が開く。外面は丁寧なミガキが施され、その後スタンプ文が施文される。燻されている。

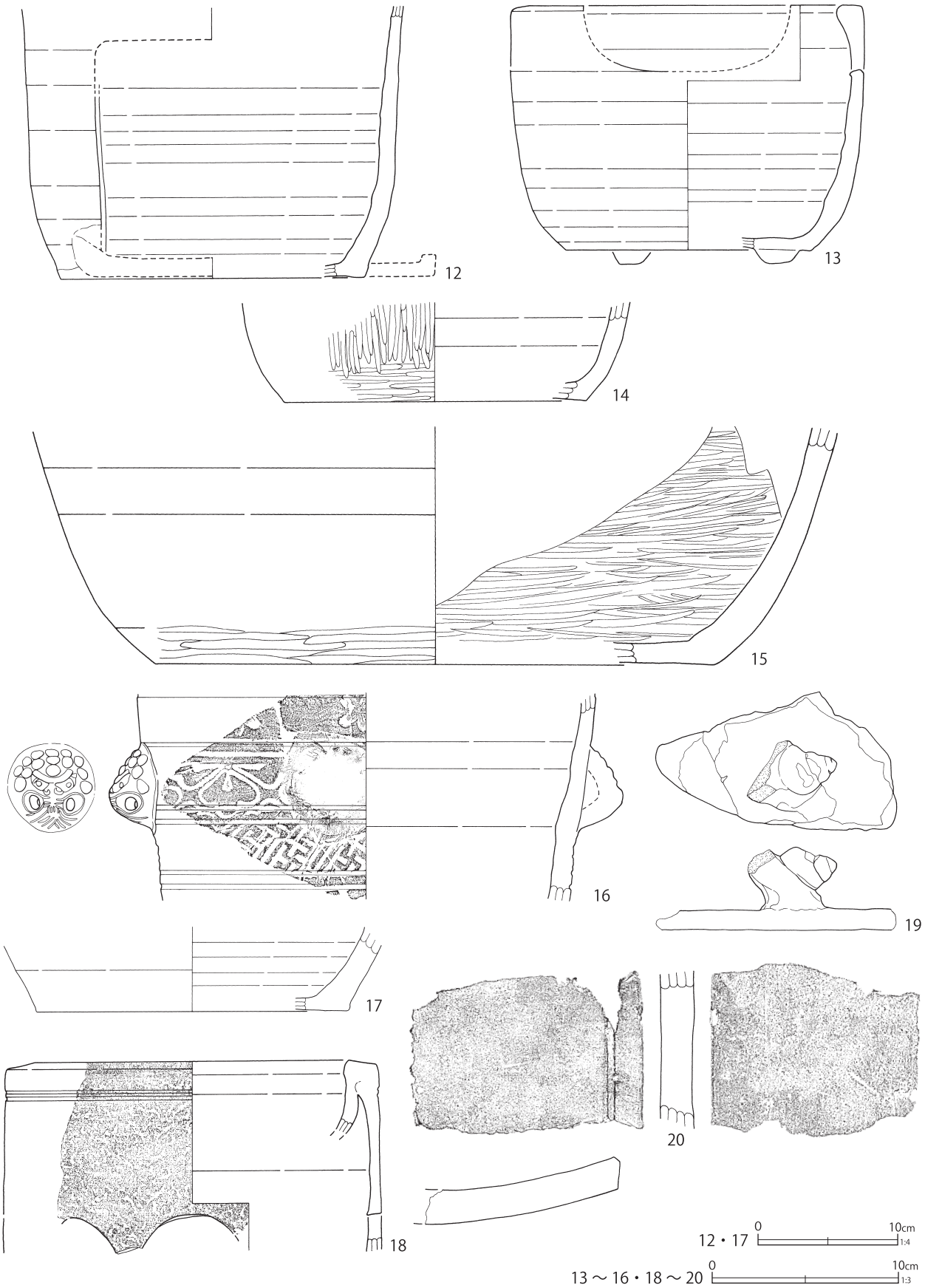
19は仕切盤である。盤上に土製の巻貝が斜めに取り付けられている。20は平瓦である。

第６表　近世以降出土遺物観察表（第16～17図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	磁器	皿	(20.2)	4.3	11.6		60	良好	白	表採	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 被熱し退色している 19ｃ後葉	5-7
2	磁器	皿	22.2	3.7	12.1		80	良好	白	トレンチ１	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面酸化コバルト染付 高台内ハリ支跡４あり 内面に線状の傷無数 19ｃ後葉	5-8
3	磁器	坏	(4.8)	5.4	3.2	K	35	良好	白	トレンチ１	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 19ｃ後葉	6-1
4	磁器	皿	(14.6)	4.1	(6.8)	K	45	良好	白	表採	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押陽刻文・酸化コバルト染付 口紅 19ｃ後葉	6-2
5	磁器	碗	10.4	5.2	3.8	K	90	良好	白	トレンチ１	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 19ｃ後葉	6-3
6	陶器	鉢	(10.6)	3.3	(4.0)	K	10	普通	灰白	B3グリッド	胎土磁質 内外面灰釉 体部くぼむ 19ｃ後半	6-4
7	土師質土器	焙烙	(33.6)	[4.0]	—	CDGHIK	30	普通	橙	トレンチ１	内耳１遺存 底部シワ条痕 外面煤付着 底面外辺に直線的な接合痕か	
8	土師質土器	焙烙	(35.6)	[4.6]	—	CDGHK	30	普通	橙	トレンチ１	内耳１遺存 底部シワ状痕 外面煤付着 内底面平滑	6-5
9	土師質土器	焜炉類	—	[8.0]	(23.0)	CDI	20	良好	にぶい橙	C2グリッド	内面煤付着 底部ナデ	
10	土師質土器	焜炉	(25.8)	[7.1]	—	CIKL	40	良好	橙	C2グリッド	被熱・煤付着 同一個体片１あり	6-6
11	瓦質土器	竈	—	[10.9]	—	CDIK	5	普通	にぶい赤褐	トレンチ１	ほぼ酸化焔焼成 外面一部黒化	
12	瓦質土器	竈	—	[19.5]	(21.8)	CDGI	25	良好	にぶい橙	C2グリッド	窓・受皿の幅は推定 被熱（橙色）内外面煤付着 接点のない２片から復元	6-7
13	瓦質土器	風炉	(16.8)	[13.8]	(13.0)	CDGI	20	良好	にぶい橙	C2グリッド	外面燻す・丁寧なミガキ 光沢あり 内面下位煤付着 脚１遺存 接点のない２片から復元（抉りは推定）	6-8
14	瓦質土器	火鉢類	—	[5.2]	(16.0)	DIK	10	良好	橙	C2グリッド	外面ミガキ 底部無調整 被熱（橙色化）	
15	瓦質土器	火鉢類	—	[12.8]	(30.0)	CDI	25	普通	にぶい橙	C2グリッド	砂目底 外面下位ミガキ状のナデ 内面ミガキ・内外面燻す 弱く被熱（橙色化）	6-9
16	瓦質土器	火鉢	—	[11.0]	—	CDIK	20	良好	橙	C2グリッド	獅子頭状把手 貫通孔あり 外面ミガキ後スタンプ施文燻す 被熱（一部橙色化）・煤付着	6-10
17	瓦質土器	火鉢類	—	[5.9]	(22.0)	CDGI	10	普通	にぶい褐	B2グリッド	底部ヘラナデか 内外面黒化	
18	瓦質土器	焜炉	(16.6)	[10.1]	—	CDGI	15	良好	明赤褐	C2グリッド	口唇部・外面ミガキ・スタンプ施文 内面煤付着	6-11
19	瓦質土器	仕切盤	長さ [12.9]	幅 [7.3]	器高 [4.4]	CDI	5	普通	明赤褐	C2グリッド	底部シワ状痕 土板上に巻貝が設置されている 被熱（橙色化）・煤付着	6-12
20	平瓦		長さ [9.0]	幅 [11.0]	厚さ 1．9	DI	-	良好	浅黄橙	表採	左端部二次的に加工（敲打痕） 凸面ナデ 凹面弱く銀化 被熱か（酸化）	6-13



第16図　近世以降の出土遺物（1）



第17図　近世以降の出土遺物（2）

Ⅴ　調査のまとめ

１　第１号溝跡の時期について

第１号溝跡は直線的な溝跡で、出土遺物から古墳時代後期に掘削され、奈良時代にかけて埋没したと推定された。問題は、古墳群内に位置するこの溝跡が古墳の一部であるのか否かである。まず、出土土器の時期から検討したい。

第１号溝跡からは土師器長胴甕（第９図３・４）と小型長胴甕（５）、小型甕（13）が出土した。第９図３の長胴甕は細身で胴部中央付近がやや膨らむ。口径よりも胴部最大径が僅かに小さい。器高は40.4㎝と最も長胴化が進行した段階である。長胴甕（４）は最大径が口縁部にある。胴部上位にやや膨らみを持ち、底部にかけて窄まる。

周辺遺跡で長胴化した甕の類例と伴出遺物、特に須恵器坏Ｈが出土した遺跡を参考に時期の検討を行うと、まず東松山市舞台遺跡Ｂ－15号住居址がある（第18図43～47）。46・47の土師器甕の器高は約40㎝で胴部はやや膨らみをもつ。器高の高い比企型坏が伴う（43・44）。比企型坏を分析した水口由紀子の、３段階第２小期（７世紀初頭）に位置付けられよう（水口1989）。ほぼ同時期のＢ－13号住居址からは段のしっかりした有段口縁坏が出土しており、６世紀末葉～７世紀初頭頃と推定される。

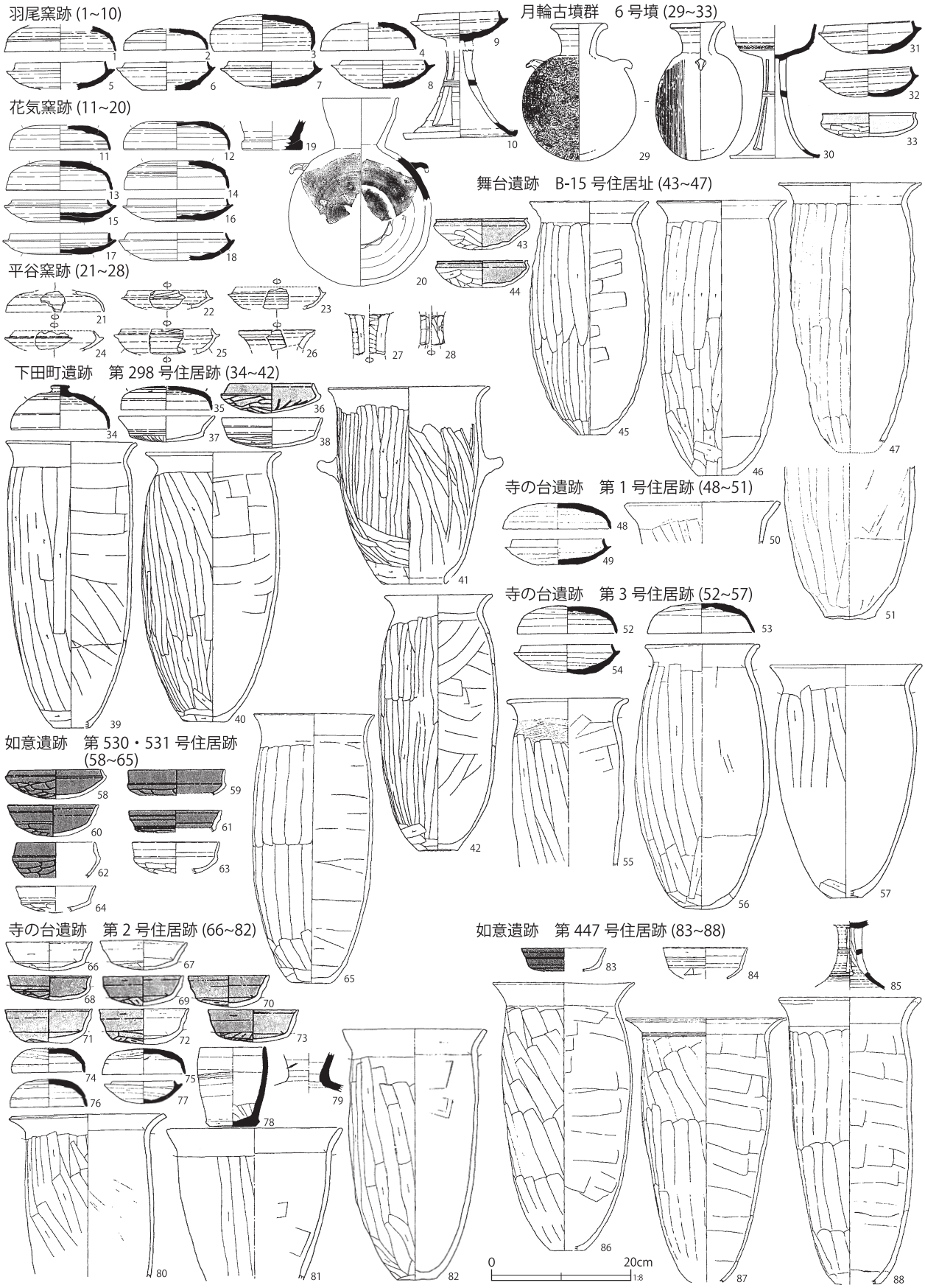
滑川町月輪古墳群６号墳（29～33）から出土した比企型坏は大振り・扁平で（33）、舞台遺跡と同一段階に比定されている。伴出する須恵器高坏（30）は五厘沼窯跡群産と推定されている（月輪遺跡群発掘調査会2008）。31の坏Ｈ身は口径12.9㎝、器高は4.5㎝で、生焼けとの表現から在地産の可能性があろうか。羽尾窯跡のそれと比較してやや器高が高い。32は南比企産で、口径12.1㎝と、31よりも小さい。提瓶（29）は搬入品で、把手は鈎状である。概ね６世紀末～７世紀初頭に位置付けられよう。

熊谷市下田町遺跡第298号住居跡（34～42）からは40.4㎝と本遺跡例と同一器高の長甕が出土した（39）。甕の胴部はやや膨らみが強く、最大径は胴部にある。須恵器坏Ｈ蓋（35）は口径13.0㎝、やや扁平で、口縁部と天井部との境に沈線を持つ。TK209併行と思われる。伴出する有段口縁坏（38）・坏身模倣坏（36）は大振りで６世紀後半～末葉と思われる。

深谷市如意遺跡第530・531号住居跡（58～65）は、土師器長甕の器高は38.1㎝で、胴部最大径が口径よりも僅かに大きい（65）。坏は有段口縁坏（口径12.8㎝）、坏身模倣坏（口径12.8㎝）がある。坏身模倣坏は口縁部が短く内傾する。６世紀末～７世紀初頭頃のものであろう。

滑川町寺ノ台遺跡第１号住居跡（48～51）・３号住居跡（52～57）は２軒が重複するがほぼ同時期と思われる。土師器長胴甕は最大径を胴部中央に持つやや古相のもの（56：器高37.5㎝）と、最大径が口縁部にあり胴部が寸胴状に直線的に延びるもの（55）がある。本遺跡例と比較すると、胴部の膨らみが強いものが主体である点でやや古い様相が認められる。57の位置づけは不明確である。

須恵器坏Ｈ蓋と坏Ｈ身は滑川町五厘沼（羽尾）窯跡群産と考えられている（酒井1989）。坏Ｈ身は口径約13㎝、蓋は口径にばらつきがあるが、口縁部と天井部との境に沈線はない。五厘沼窯跡群には羽尾窯跡（１～10）の他に花気窯跡（11～20）、平谷窯跡（21～28）も近接し、同一窯跡群と捉えられる。蓋の口縁部と天井部との境に沈線を持つものが主体となる滑川町羽尾窯跡が古く、口縁部境の沈線が消滅するものが主体となる花気窯跡と平谷窯跡が時期的に新しい。詳論は省くが、羽尾窯跡→花気窯跡→平谷窯跡の順に築窯されたと考えられる。須恵器専焼窯として出発し


羽尾窯跡 (1~10)
花気窯跡 (11~20)
平谷窯跡 (21~28)
下田町遺跡　第 298 号住居跡 (34~42)
如意遺跡　第 530・531 号住居跡 (58~65)
寺の台遺跡　第 2 号住居跡 (66~82)
月輪古墳群　6 号墳 (29~33)
舞台遺跡　B-15 号住居址 (43~47)
寺の台遺跡　第 1 号住居跡 (48~51)
寺の台遺跡　第 3 号住居跡 (52~57)
如意遺跡　第 447 号住居跡 (83~88)
0
20cm
1:8

第18図　参考資料

た五厘沼窯跡群は平谷窯跡の段階で瓦陶兼業窯に転換し、寺谷廃寺の創建に関わったと理解されている（酒井2011）。酒井によれば、羽尾窯跡がTK209型式で７世紀初頭、平谷窯跡が620～630年代の操業と想定された。花気窯は平谷窯にやや先行する段階となろう。寺ノ台遺跡第１・３号住居跡の坏Ｈ蓋は沈線が消失しており、羽尾窯跡に後出する。坏身の器高が高く、坏蓋の口径が大きいものが含まれ、花気窯よりもやや古い様相も窺えるが、花気窯と概ね平行する段階と考えておきたい。

寺ノ台遺跡第２号住居跡（66～82）の長胴甕は最大径が口縁部にあり、小型長胴甕（第９図５）に類似した砲弾型の甕（器高36.0㎝）（82）や第９図４によく似た甕（80）、胴部に膨らみを持つものがあり、本遺跡例とほぼ同時期と思われる。土師器坏は比企型坏（口径11.8㎝）、有段口縁坏（口径11.6～12.8㎝）がある。比企型坏・有段口縁坏共にやや小型化している。

須恵器は坏Ｈ身（口径9.0㎝）、坏Ｈ蓋３点（口径10.4、11.0、11.9㎝）があり、五厘沼窯跡群産である（藤野2011）。須恵器坏Ｈは平谷窯跡よりも小振りで明らかに一段階新しい。須恵器坏Ｇ、土師器北武蔵型坏は伴出せず、出現前の段階と思われる。平谷窯跡に後出する７世紀２/４期後半～中葉と考えられる。

如意遺跡第447号住居跡（83～88）の土師器長甕（86～88）は器高40㎝前後で口縁部に最大径がある。86は本遺跡出土甕に似て、胴部上位に膨らみを持っている。87は口縁部が「く」の字に強く折れ、薄い器壁で胴部は砲弾形に窄まる。砲弾形の器形は新出の様相である。須恵器長脚２段２方（？）高坏がある。土師器坏では口径12㎝前後の小振りの有段口縁坏破片を含む。北武蔵型坏が含まれないことから、７世紀前半（２/４期）～中葉頃の所産と考えておきたい。本遺跡第１号溝跡出土の甕は概ね同時期かやや古い段階と思われる。

２　第１号溝跡の性格について

前節の検討により、第１号溝跡は７世紀２/４期～中葉に掘削されたと推定した。直線溝で、埴輪は伴わない特徴がある。埼玉古墳群ではTK43段階をもって埴輪樹立が停止し、須恵質埴輪壺の存在からTK209型式古段階の中の山古墳をもって前方後円墳が消滅したとされている（関2018）。おそらく７世紀初頭頃には埴輪も前方後円墳も消滅したと考えられ、埴輪が伴わないことを根拠に古墳ではないとは言えない。また、前方後円墳も消滅した段階であるため、古墳であるとすれば円墳ではなく方墳の可能性を想定する必要がある。

周溝から長甕が出土する古墳

第１号溝跡からは土師器長甕と小型甕、焼土塊がまとまって投棄されたような状態で出土した。古墳の供献用土器には土師器坏・壺・高坏類や須恵器が用いられ、土師器甕は使用されることは少ないようである。

土師器長甕を周溝に埋置（出土）した古墳は、滑川町屋田６号墳（円墳）周溝から長胴甕２個体と壺が出土した。長甕の１つは底部穿孔されていた。５世紀末～６世紀初頭頃であろう。屋田遺跡に隣接する滑川町月輪古墳群54号墳（円墳）から土師器長甕が周溝底から横倒しに置かれた状態で出土した。６世紀初頭である。月輪古墳群38号墳（円墳）からは周溝覆土上層から横倒しの土師器長甕が出土した。６世紀初頭に比定されている（月輪古墳群発掘調査会2008）。熊谷市冑山の大境南古墳群２号墳は全長31ｍの前方後円墳で、周溝内から底部穿孔された土師器壺が出土した。土師器長甕破片も出土しているが、周溝内出土か否かは不明である（註１）。埴輪を持たないため７世紀初頭の築造と考えられている（熊谷市2015）。

周溝から長甕が出土する例は鴻巣市新屋敷遺跡Ｄ区60・63・65号墳でも確認できる。時期的に５世紀後葉～６世紀前半で本遺跡例よりも古い。60号墳では多量の煤が付着した甕が破砕された状態

で出土している。

周溝底面を整地する古墳

第１号溝跡は最下層が整地土の可能性がある。古墳の周溝底面を整地する例としては滑川町月輪古墳群55号墳がある。これは６世紀初頭に築造された帆立貝式前方後円墳で、周溝最下層が人為的に埋め戻されていた。底面を均すために整地されたと考えられている。月輪古墳群では調査された59基の古墳中、39基の古墳に同様な人為的な堆積（整地）土が認められた。また、東松山市下松５号墳（東松山市遺跡調査会2004)、鴻巣市新屋敷Ｄ区でも同様な整地土の堆積が確認されており、第１号溝跡の堆積状況は古墳にも共通すると考えることができる。

溝中土壙を持つ古墳

第１号溝跡には２基の土壙（第６・７号土壙）が掘り込まれていた。土層観察から最下層の堆積土を切り込んでおり、規模・形態などから第１号溝跡に伴う「溝中土壙」と考えられた。覆土上層は第１号溝跡堆積土に覆われており、溝掘削直後か、あまり時間的に隔たらずに造られ、奈良時代には埋没したことが判明している。

後期古墳の周溝に掘り込まれた埋葬施設としての「溝中土壙」の類例は検索できなかった。熊谷市箕輪の東山古墳群１号墳（全長45.44mの帆立貝式前方後円墳）と、熊谷市冑山の阿諏訪野遺跡１号墳（円墳）から「溝中土壙」が検出された。前者は７世紀初頭～前半である（大里村教育委員会1997)。いずれも埋葬施設か否か不明である。

まとめ

第１号溝跡が古墳の周溝であるとの証拠は得られなかった。もし、古墳であるとすれば方墳となる。方墳の類例は少ないが、北４㎞に位置する深谷市鹿島古墳群から２基（川本町教育委員会2005)、小川町穴八幡古墳（小川町1999）が確認されている。いずれも７世紀代の終末期古墳と考えられ、前者では周溝は不明確であるが、穴八幡古墳では二重の周溝が巡る。

第１号溝跡の東側には対応する周溝はないので、方墳であれば西側に展開する筈だが、西側にも墳丘の痕跡は見られず、石室を構成したであろう凝灰岩等の石材も検出されなかった。また、第６・７号土壙についても埋葬施設か否か不明である。土師器甕を周溝に埋置する例はいくつかの古墳で確認できたが、確実に７世紀に降る例は抽出できない。溝の最下層を整地する行為は古墳と共通することは確認できた。

現状では第１号溝跡の性格は不明とせざるを得ないが、周囲に集落や住居跡はなく、煮炊用具である土師器長甕が焼土を伴う形で投棄されており、「黄泉戸喫」に類した埋葬儀礼や祭祀行為が第１号溝跡の周囲で執り行われた可能性はあろう。また、日高慎の述べるような葬送儀礼や首長権継承の場としての区画溝を伴う「方形区画施設」（日高2021）も念頭に置く必要があろう。今後の周辺地域の調査例を待ちたい。

註１　熊谷市教育委員会のご厚意で実見させていただいた。土師器壺は弱い稜があり、胴部は壺としてはやや長胴化しており、新しい様相がある。土師器長甕は口縁部が強く横に折れ、胴部は上半に膨らみを持つ。周溝から出土したか否か確認できなかった。

引用・参考文献

大里村教育委員会　1997『大里村南部遺跡群Ⅰ』
小川町　1999『小川町の歴史　資料編１　考古』
川本町教育委員会　2005『鹿島73号古墳　鹿島古墳群初の方墳』川本町発掘調査報告書第12集
江南町教育委員会　1989『塩西遺跡Ⅱ』江南町文化財調査報告９
江南町　1995『江南町史資料編１考古』
江南町教育委員会　1988『本田・東台・上南原』
江南町教育委員会　1998『千代遺跡群－弥生・古墳時代編－』

駒澤大学考古学研究室・滑川町教育委員会　2011『寺谷廃寺・平谷窯跡Ⅰ』
埼玉県教育委員会　1980『根平』埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1984『屋田・寺ノ台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1992『蟹沢・芳沼入・芳沼入下・新田坊・尺尻・尺尻北・大野田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第119集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1994『大野田西遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第138集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1998『新屋敷遺跡Ｄ区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第194集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2001『大木前 / 小栗北 / 小栗 / 日向』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第259集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2002『谷ツ遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第282集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2006『下田町遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第319集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2009『古里古墳群駒込支群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第363集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2021『油面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第470集
埼玉県立歴史資料館　1987『埼玉の古代窯業調査報告書』
酒井清治1989「古墳時代の須恵器生産の開始と展開－埼玉を中心に－」『研究紀要』第11号　埼玉県立歴史資料館
酒井清治2011「５－２　寺谷廃寺・平谷窯跡出土の瓦と須恵器について」『寺谷廃寺・平谷窯跡Ⅰ』
塩野　博　2004『埼玉の古墳』さきたま出版会
滑川町月輪遺跡群発掘調査会　2008『月輪遺跡群』
関　義則　2018「埼玉古墳群の学術的評価と歴史的意義」『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』埼玉県教育委員会
滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群発掘調査会　1997『滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群』
東松山市遺跡調査会　2004『上松本遺跡（第２次)』埼玉県東松山市文化財調査報告書第２集
日高　慎　2021「古墳時代の葬送儀礼」『古墳時代のマジカルワールド』松戸市立博物館
藤野一之　2011「５－１　瓦・須恵器の胎土について」『寺谷廃寺・平谷窯跡Ⅰ』
水口由紀子　1989「いわゆる比企型坏の再検討」『東京考古』７
村上伸二　1999「嵐山町将軍沢窯跡第１支群Ａ地点の調査」『第32回遺跡発掘調査報告会発表要旨』大玉考古学会
寄居町遺跡調査会　2014『前塚田遺跡』寄居町遺跡調査会報告第37集
嵐山町　1983『嵐山町史』
嵐山町　1997『戦い・祈り・人々の暮らし－嵐山町の中世－』嵐山町博物誌第５巻・中世編
嵐山町　2003『丘陵人の叙事詩　嵐山町の原始・古代』嵐山町博物誌第４巻
嵐山町遺跡調査会　1987『神山遺跡』嵐山町遺跡調査会報告１
嵐山町遺跡調査会　1987『古里古墳群　北田遺跡・上土橋支群・駒込支群の発掘調査』嵐山町遺跡調査会報告２
嵐山町遺跡調査会　1988『行司免遺跡－本文編－』嵐山町調査会報告４
嵐山町遺跡調査会　1988『行司免遺跡－遺物図版編－』嵐山町遺跡調査会報告５
嵐山町遺跡調査会　1995『六丁遺跡』嵐山町遺跡調査会報告７
嵐山町遺跡調査会　1998『西ノ谷遺跡』嵐山町遺跡調査会報告８
嵐山町遺跡調査会　2000『金平遺跡Ⅱ』嵐山町遺跡調査会報告９
嵐山町教育委員会　1980『金平遺跡』
嵐山町教育委員会　1991『町内遺跡Ⅰ行司免遺跡(２次)・篠新田遺跡の発掘調査』嵐山町遺跡埋蔵文化財調査報告４
嵐山町教育委員会　1999『町内遺跡Ⅲ金平遺跡発掘調査報告書第３・第４・第５地点』嵐山町埋蔵文化財調査報告７
嵐山町教育委員会　2001『嵐山町比丘尼山廃寺の発掘調査』嵐山町博物誌調査報告第６集
嵐山町教育委員会　2001『屋田古墳群－ガスステーション建設事業に伴う発掘調査報告書』嵐山町遺跡調査報告10
立正大学考古学研究会　2002　『第四紀』平成14年度活動報告
渡辺　一　2002「古代の丘陵開発とその世界－『続風土記の世界－』」『あらかわ』第５号　あらかわ考古談話会